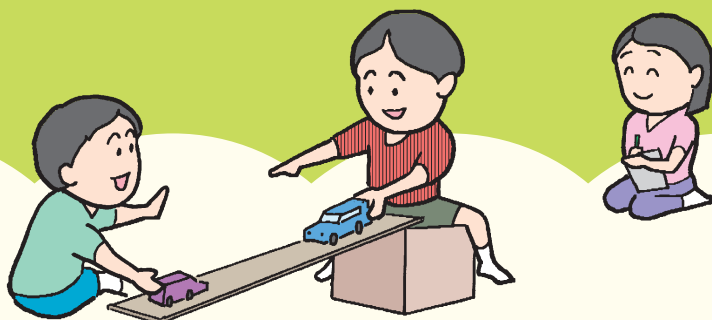
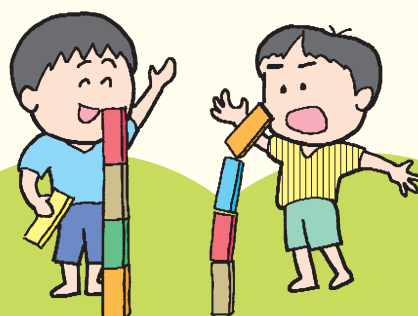
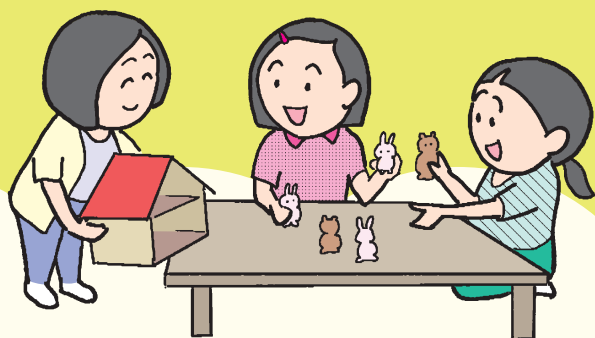




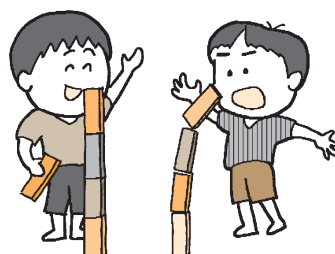
難聴児 バディ・システム ハンドブック



国立研究開発法人日本医療研究開発機構 (AMED)
「聴覚障害児のバディ・システムについての研究」班



難聴児 バディ・システム ハンドブック



まえがき

聴覚特別支援学校・ろう学校では、聞こえにくいことを前提として学校生活全体が運営されています。一方、通級指導教室・難聴学級の子どもたちは通常学級で過ごす時間がありますので、周囲の理解、支援が必要になります。周囲の理解、適切な支援を受けることができない子どもたちは、学習への支障だけでなく、自信など自尊心の形成にも影響します。しかも、聞こえにくさは一人一人異なっていますし、周囲の環境も様々です。その子の能力を最大限に引き出すために、その子の聞こえにくさを理解したうえで適した方法で周囲が支援するとともに、環境調整を進めていかないとはいけません。しかしながら、通級・難聴学級では先生の異動のために専門性を維持することが難しい現状もあります。小児パディ・システムは、聞こえにくい子どもたちが通常学校・通常級に就学した時の支援の一助となることを願い、作成しました。専門性をもった先生方の人数が限られている状況で、先生方自身の努力にのみ頼ることは現実的ではありません。2000年にWHOで採択された国際機能分類は、障害をもった方とそうでない方の共生社会をうたっています。共生社会とは障害をもった方が暮らしやすい社会のことです。日本も障害者権利条約を批准し、共生社会を作ることを国の方針としています。国際機能分類からみると、生活機能、背景因子、すべて整えないと聞こえにくい子どもたちの学校生活に影響が及んでしまいます。本書が、聞こえにくい子どもたちが充実した学校生活を送れる手助けとなれば幸いです。

2022年5月17日

研究代表者 中川尚志

CONTENTS

まえがき | 中川尚志

I 難聴児を取り巻く教育現場での現状と課題 6

- 1 小児の難聴 | 片岡祐子 6
column
バディ・システムスタートブック刊行に際して ～聴覚障害の当事者として～ | 野田哲平 8
- 2 教育現場における現状と課題 | 平島ユイ子 10
column
私の小中学校時代を振り返って | 宮田 遼 12

II バディ・システムとは 14

- 1 バディ・システムの考え方と意義 | 藤野 博 14
- 2 難聴児バディ・システムに必要な目標 | 平島ユイ子 15
column
22歳の難聴の先輩から 20
ASD児におけるバディ・システム | 森脇愛子 21

III バディ・システムの導入 22

- 1 全体の流れ | 竹森俊之 22
- 2 情報収集をしよう | 倉島 楓 24
- 3 バディを組んでみよう | 小木原弘晃 26
- 4 評価をしてみよう | 小木原弘晃 28
column
きこえの教室からバディ・システムを伝える大切さ | 小木原弘晃 32

IV バディ・システムの実践 | 池田 寛 34

- 1 会話支援について 34
- 2 個々の子どもに対応した準備 38
- 3 支援者の心構え 40
- 4 活動場所の設定 43
- 5 4つのアプローチ方法 44
- 6 フェーズごとのアプローチ方法 46
- 7 再び会話支援について 51
column
通常の学級や家庭とのコラボレーション | 池田 寛 52

V

バディ・システムFAQ —こんなときどうしたらいい?—

53

難聴のある子ども同士の組み合わせがよいのでしょうか? 53

バディとの相性が悪い時は、どのようにすればよいのでしょうか? 53

バディ・システムに難聴の程度は関係ありますか? 54

補聴器の子どもと人工内耳の子どもで、対応に違いがありますか? 54

バディ・システムを組めば、自然と仲間意識が育つのですか? 55

見守るときに、子どものどこを見ていればよいのですか? 56

家庭内で難聴のない兄弟姉妹ともバディ・システムはできますか? 57

家庭内での「会話支援」はどのようにするのがよいのでしょうか? 57

通常の学級でバディを組むことは、周囲の子どもたちに、どのような影響がありますか? 58

通常の学級でバディを組むことは、本人に、どのような影響がありますか。 58

VI

好事例紹介

59

バディ・システム好事例紹介 59

column

難聴児の教育サイトの開設の経緯等について | 内田美花 62

I 難聴児を取り巻く教育現場での現状と課題

1 小児の難聴 | 片岡祐子

難聴発見から早期療育

音声を用いた言語能力の獲得には臨界期があり、難聴をそのまま放置していると、言語発達の遅れや構音の障害を来し、ひいては学習、コミュニケーションの問題につながります。逆に早期に補聴を開始することで、音声によるコミュニケーションができるようになる可能性も高くなります。そのため、難聴を「早期発見、早期療育」を目標に、生後数日で行う聴覚検査である“新生児聴覚スクリーニング”が日本でも2001年に開始され、今や9割以上の新生児が受けています。新生児聴覚スクリーニングで難聴が疑われた場合には、一般的には生後3か月までに医療機関で精密検査を行い、確定診断を受け、両側性難聴があれば生後6か月までに補聴器装用を開始します。

早期発見早期療育開始体制の普及や人工内耳をはじめとする先端補聴機器の進歩により、難聴者の聴取能、言語発達、コミュニケーション能力は飛躍的に向上しています。さらに補聴援助システム等を併用することで、難聴の程度が重くても音声によるコミュニケーションが可能となる児は増加し、支援学校ではなく地域の学校に通学する児も近年増加し、支援学級も含めるとその割合は難聴児の60%以上になっています。社会の中で聴者と一緒に勉強し、働いている人は多いのです。

難聴者の聞き取り、言語発達

(ア) 難聴者の聞き取り

補聴器や人工内耳を使うことで、多くの場合静かな場所での聞き取りは良好になります。高度難聴者の人工内耳装用による語音聴取は、静寂下では75-90%とされています。

ただし、補聴器や人工内耳を使っても、難聴者は聴者と同等の聴取はできるわけではありません。また両側性難聴だけでなく一側性難聴であっても、聞こえにくさで困っている人は多いです。一



般に難聴者の言葉の聞き取りは、雑音下や距離が離れた場所といった条件下では悪くなります。軽度難聴であっても正常聴力者と比較すると、雑音が強い環境では30%以上も明瞭度に差があります。学校生活では、校外学習や一斉指導の場、授業においてはグループ学習や質問応答などにおいて、聞き取りが難しくなることが多くなります。ですから、学校や職場も含めた社会で必要な配慮や支援を受けながら、少しでも聞き取りやすい環境を作っていくことが望ましいのです。

(イ) 言語発達・学習

早期に補聴器や人工内耳装用を開始することで言語発達は良好となります。日本の多施設共同研究では、新生児聴覚スクリーニングにより生後6か月以内に療育を開始できる確率は20倍以上となり、さらに早期に療育を開始した児が良好な音声を用いたコミュニケーション能力を獲得する確率は3倍以上向上することが報告されています。具体的には語彙力（言葉の数）、構文能力（助詞や助動詞、受け身などの使い方）などが向上しています。算数や国語などの学習習得度も良好となっています。

ただし、中には言葉の聞き間違いや発音不明瞭、言語発達の遅れといった問題が生じる人もいます。難聴の程度が重い人だけでなく、診断が遅れた場合や補聴器装用をしていない場合に顕著になってきます。教科学習でも英語や音楽では細かい音色、イントネーションの聞きにくさがあり、特に人工内耳装用者では難しいと感じている人は多く、補聴援助システムなどを使っても限界はあります。

得意なこと、苦手なことはそれぞれの難聴の程度や興味、特性などにより差があります。苦手な部分を支援しつつ、得意な分野を伸ばし、可能なことを増やしていくことが必要です。



バディ・システムスタートブック刊行に際して ～聴覚障害の当事者として～

野田 哲平

筆者は幼少時に感音難聴と診断されたにもかかわらず、適切な療育や指導を受けることなく通常学級のみで学齢期を終えました。聴覚障害児を対象としたバディ・システムのスタートブック刊行に際し、これまで感じてきたこと、当事者から見える改善すべき点などを綴ってみたいと思います。



自画像

九州の田舎で 1970 年代に生まれた筆者ですが、当時は新生児スクリーニングもなく、明確な記録が残っていないため何歳から難聴があったのかは不明です。幼稚園の頃の自画像には耳が描かれておらず、ただ書き忘れただけなのか、音声情報が少なかったためなのかはわかりません。小学校 1 年生の頃にはどうやら難聴があるらしいことがわかったようで、最前列で授業を受けていました。当時の学校には、環境整備や情報保障の概念はなく、ただ声が大きければ聞こえるだろうという理解のされ方であったように思われます。中耳炎は無かったにもかかわらず、近医耳鼻咽喉科クリニックに通院して定期的に耳管通気^{注1}を受けていました。ようやく 10 歳頃、地元の大学病院の耳鼻咽喉科を受診し精密検査を受け、中等度～高度感音難聴と診断されました。家族や学校、かかりつけ医を含む周囲の理解の乏しさが伺えます。そのような環境ではセルフアドボカシー^{注2} (1) が育つはずもなく、補聴器装用を拒否して 10 代を終えました。多くの難聴児がそうであるように (2)、英語・音楽が苦手であり、学級会や集団討論など多数が発言する場で不便を感じていました。片岡らは難聴が軽度であっても学校生活全般で支障を来し、外国語の学習や遠距離での聴取が必要な体育、音感が必要な音楽が苦手になり得ると報告しており、それに合致する学齢期でした。

授業中は最前列で大きい声で話す教師の声を頑張って聴き取ることに多大な労力を払い、教科書からの視覚情報が頼りでした。急に当てられた時など、質問の内容がわからず困るケースや、他の生徒の回答が聴き取れないので重複が不安であったりしました。このため、最初に手を挙げて発表してしまう作戦を取ることもありました。隣や前後の席に親切的友人が来た時は安心したことを覚えています。Buddy とは一对一の相棒のことをさしますが、手を差し伸べてくれる友人は複数おり、色々と助けられました。

大学は理系の学部に進みました。対人関係が複雑さを増すに伴い、他人とのコミュニケーションに苦手意識を覚えることが多くなっていました。1 対 1 の会話なら辛うじて・複数回聞き直すことにより可能ではありましたが、友人同士の会話に入ることは困難で、聞こえたふりをすることが多くありました。男性の声はきこえる場合もありましたが、女性の小さな声は相当に困難を感じました。振り返ると、聴取に努力が必要であったり読唇のために口許を注視していたりで、





微細な表情の変化に気づきづらく、相手の真意を測りにくいと感じることが多かったように思われます。

19歳時に左耳にオーダーメイドの挿耳型補聴器を装用しました。当時デジタル補聴器はようやく市場に出るかどうかという頃であり、アナログ式のものでありましたが、こんなに世界には音がたくさんあるのかという驚きと、一度で人の話が聞き取れるという喜びがありました。程なくして右にも追加し両耳装用となりました。音に立体感が出てある程度の方向感もわかるようになりました。その後、医学部を再受験して合格し通い始めましたが、周囲の難聴に対する理解度は期待していたほど高くはなく、補聴器装用をしていることに対し、良くも悪くも特別扱いされませんでした。座学では大きな問題はなかったが、臨床実習が始まるとちょっとした耳学問ができないために不利を感じることがありました。読唇も状況に応じて併用しており、補聴器装用前に感じていた人間関係構築の困難さは若干改善したものの残っており、コミュニケーションの経験不足を痛感する日々でした。ここでも、聴き取りづらい時には複数の友人の助けを必要としました。

難聴の当事者として最も伝えたいことは、難聴であることの不利益、不便さは難聴者本人にしかわからないということです。筆者も知識としてわかってはいても、重度難聴者・児の困りごとは想像するしかありません。児童が多くの時間を過ごす教育現場で、難聴に対する理解が深まり、様々な形で聴覚障害児をサポートする体制を整えることは、合理的配慮が法制化された現在では義務ともいえます。

自閉症スペクトラム児を対象に作成された「バディ・システムスタートブック」の著者である藤野博先生にも加わっていただいて刊行するこの「聴覚障害児のバディ・システムスタートブック」が、きこえの問題で困っている児童・生徒本人と周囲の人々への一助となれば幸いです。



注釈

注1 耳管通気法 耳と鼻の間の管から空気を耳に通す処置。滲出性中耳炎などに対し行われる

注2 セルフアドボカシー 自分の障害を理解し、周囲へ理解と協力を上手に要求すること、またはその技術

[1] R. Michael and H. M. Zidan: Differences in self-advocacy among hard of hearing and typical hearing students. Research in Developmental Disabilities 2018, 72, 118-127.

[2] 片岡 祐子, 菅谷 明子, 中川 敦子, 田中 里実, 問田 直美, 福島 邦博, 前田 幸英, 假谷 伸: 両側難聴児・者が学校生活で抱える問題に関する調査の検討. Audiology Japan 2021, 64 (1), 87-95

2 教育現場における現状と課題 | 平島ユイ子

難聴児の教育は、特別支援学校、特別支援学級、通常の学級、通級による指導（通称：通級指導教室）で行われています。一般には、小学校入学から義務教育が開始されますが、聴覚障害児のための特別支援学校には幼稚部があります。乳幼児期の指導は、教育機関、医療や療育機関が役割分担しながら行っています。入学する学校は、個々の難聴児の教育的ニーズや居住する地域の状況に保護者の意向を加味して決定されます。

近年では早期の難聴診断と補聴機器の活用、療育の開始により聴覚を活用して地域の学校に就学する難聴児が増加しています。それに伴い通常学校に難聴児を対象とした特別支援学級（難聴学級）が設置されるケースも増えています。

地域の学校でのコミュニケーション手段は概ね音声口話です。通常学級は、最大で40人の児童がおり、騒がしいのがあたりまえです。騒がしい中でことばを聞き取ることは難しくなります。そのため、消音キャップ（図1）やテニスボールを利用して机椅子の雑音を抑制することや、板書を増やすような配慮がよく行われています。また、聴覚援助システム（FMシステムやロジャー）を利用して先生の声を直接難聴児に届けることもできます。学校によってはノートテイクや手話通訳者が配置されている場合もあります。県や市町村によってどのような支援がなされているかが異なります。



図1 消音キャップ
いろいろなタイプがあります。

難聴児の聞こえや情報収集力、必要とする支援は個々に異なっており、不足する支援は難聴児を困惑させ、行き過ぎる支援は子どもの自主性を摘み取ります。先生や友達が話している内容が全くわからないと、困惑からあきらめに移りやる気をなくさせます。また、先生や周りの友達が難聴児の気持ちを組取り過ぎて、世話をやき過ぎることも難聴児の自主性を失わせます。個々の難聴児を理解し、その子に合った支援を考える必要があります。難聴児が苦手とするのが先生の指示や友達の発表の聴取、子ども同士のコミュニケーションです。話し手が難聴児に伝わりやすい話し方ができると困難さを軽減することができます。

小学校1年生の難聴児が、「この子、僕の友達。」と言って二人の友達を連れてきました。よく遊ん



でいるようです。3人のおしゃべりを聞いていて、どうして友達なのかがよくわかりました。二人とも早口でないのです。そして、誰かが話しているときは、じっと聞いていて他の人は話さないのです。誰かが話し終わったら、「僕はね（と相手を見て）、…」とゆっくり話し始めます。ときどき「どういうこと?」「なんて?」とか聞き返していますが、嫌がるそぶりもなく言い直してくれているようです。どのような話し方をする子どもとよく関わっているかを観察すると、その子に合った話し方に気づくことができると思いました。

特別支援学校・特別支援学級・通級による指導の対象となる障害の程度

下段は、令和元年9月25日新しい時代の特別支援教育のあり方に関する有識者会議資料3-1

特別支援学校	特別支援学級	通級による指導 (通常学級に在籍)
個々の聴覚障害の状態に対応した指導を少人数で行うことができる。手話や音声を用いたトータルコミュニケーションを用いる学校が多いが、学校によって異なる。	個々の聴覚障害に対応した指導を少人数で行うことができる。通常学校に設置されるため、音声でコミュニケーションする学級が多いが、学級によって異なる。	難聴児が、週に1回から数回、通ってくる。難聴に対応した指導を個別や難聴児グループで行う。
特別支援学校・特別支援学級・通級による指導の対象となる障害の程度 令和元年9月25日新しい時代の特別支援教育のあり方に関する有識者会議資料3-1		
両耳の聴力レベルがおおむね60デシベル以上のもののうち補聴器等の使用によっても通常の話を解することが不可能、または著しく困難な程度のもの。	補聴器等の使用によっても通常の話を解することが困難な程度のもの	補聴器等の使用によっても通常の話を解することが困難な程度の者で、通常の学級での学習におおむね参加でき、一部特別な指導を必要とするもの
学校教育法施行令第22条の3	平成25年10月4日初等中等教育局長通知	



私の小中学校時代を振り返って

宮田 遼

私は5歳のときにおたふく風邪のウイルスであるムンプスウイルスによる右急性難聴を患い、以降片耳難聴で過ごしております。今でこそ両耳聴効果の有用性が明らかになってきていますが、当時はもう片方の耳が聞こえていれば問題ないという考えの方がスタンダードであったと思いますし、私も補聴器などを使用せずにこれまで過ごしてきました。片耳難聴では、難聴側からの音が聞き取りにくいだけでなく、音源定位や騒音下での音声認識が困難となり、それによる言語発達の遅れ、学業成績の低下などが起きる可能性があります。子供の頃の私は、右からの音は聞きにくいなあ、とは思っていましたが、雑音下などでは周りの人と比べて私だけが聞き取りづらかったことなどは認識しておらず、その聞こえが当たり前と思って過ごしていました。一番思い起こされるのが、中学生のときに仲の良い友人に「なんでもかんでも『え?』と聞き返すのやめろ」と言われたことです。言われて初めて気がついたのですが、声をかけられたときは必ず「え?」と反応してしまっていました。私にとってこの出来事は衝撃的で、“周りの人が普通に話している声が自分には聞こえていないのだ”ということを最も認識したときでした。意識を変えると、すぐさま「え?」と聞き返すことは減りましたが、聞き取りが良くなるわけでもなく、今度は聞こえていないのに適当に相槌を打つ、ということを覚えてしまいました。正直なところ、聞こえていなくて聞き返しが多かったり適当に流してしまったりというのは今でもあり、小中学生の頃





に形成されたスタイルは、なかなか変えることが難しいと感じています。自分の悪いところをすべて難聴のせいにするのも良くないのですが、自分の性格が引っ込み思案だったり、自信がなかったり、コミュニケーションを取るのが下手だったりするのは、難聴があることが関係しているのかな、と考えてしまいます。欲しかった支援というのを振り返ってみて考えてみますと、自分から、知り合う人全員に片耳が聞こえないことを伝えたり、席の配置を工夫することをお願いしたりなどを行うのは難しいと感じていましたので、先生から何かしらの形で全員に周知してもらったり、協力するように言ってもらえたらありがたかったと思います。よく考えると、先生にも自分に難聴があることを伝えていなかったかもしれませんので、先生には難聴があることを伝えないといけないよ、ということなどを含め、幼い片耳難聴者がどのように立ち振る舞えばよいのか、工夫をしていけばよいのか、本人が理解できるような教育が必要ではないかと思います。

バディ・システムについては今回の研究で初めて知りました。もし同じような境遇のバディがいれば、片耳難聴においての悩みや工夫の方法などを共有でき、よりよい生活につながります。難聴児の生活の改善に非常に役立つシステムの一つになるのではと考えます。バディ・システムが、見過ごされがちな片耳難聴児にとっても助けになればと思います。



II

バディ・システムとは

1 バディ・システムの考え方と意義 | 藤野 博

バディ・システムとは、2人の人が一緒に活動する中でお互いをケア、サポートする仕組みのことで、海難救助などで知られています。このシステムは様々な場面で導入されており、障害のある子どもたちの支援などにも活用されています。たとえば、注意欠如・多動症（ADHD）の子を物静かで几帳面で責任感の強い生徒と組ませることの効果などが指摘されています¹⁾。また、自閉スペクトラム症の子どもは、仲間集団よりも特定の一人の子どもの方が、また、よく知らない相手よりはよく知っている相手の方が関わりやすいことも報告されています²⁾。

発達障害のある子どもたち同士の小集団活動がコミュニケーションと社会性の発達支援に良い効果をもたらすことは様々な形で報告されてきました^{3) 4)}。特定の子どもとの持続的に関わることは、相手の視点に立って考える態度を育て、社会的認知の発達を促進することにもつながります。そして、同じ特徴をもつ子ども同士の活動がコミュニケーションを促進する可能性は、近年、実験的に検証もされています⁵⁾。自閉スペクトラム症（ASD）のような行動をする人物が登場する文を読んでいるとき、ASD 者は共感に関わる脳の部位が活性化していたという知見です。平たくいうと ASD 者は ASD 者に共感するということであり、この自閉的共感性（Autistic Empathy）の仮説は類似性仮説とも呼ばれています。俗にいう「波長が合う」ということでしょう。

私の研究室では ASD 児童の社会性の支援のための活動を長年行ってまいりましたが、その中で同様の印象をもつに至りました。そして、当初は指導者と子どもの個別指導と参加する子どもたち十数名が一緒に行う集団指導という形をとっていたのですが⁶⁾、バディ・システムを試行的に導入し、その効果を実感しました⁷⁾。それまである程度の期間が必要であった子どもたち同士の関係形成にかかる時間が大幅に短縮されることがわかったのです。また、バディ・システムの効果検証のための研究を行ったところ、向社会性の発達の面で特に効果があることが明らかになりました。向社会性の尺度は、他者への自発的な気遣い、共有、手助け、親切さなどを評価するものです。この研究から、バディ・システムは、他者に向けた共感的でサポートティブな行動を促進する効果をもつ可能性が示唆されました。

私たちは同じタイプの子どもの同士のパairリングによるコミュニケーション促進効果をねらいましたが、障害のない子が支援を必要とする子をサポートすることを目的とする場合もあるかと思います。しかし、その場合でも相棒を意味する「バディ」であるからには一方的に支援する／される関係でなく互恵的な関係が必要と考えられます。互恵的といっても何らかの利益の提供よりも情動的な絆



が重要で、義務として行うのではなく自然に相手を気遣うことがお互いにできているかどうかです。それこそがバディ・システムの真の効果といえます。また、私たちの研究が示唆したように、バディ・システムによる活動が続ける中で子どもたち同士の共感的な関係が形成されることが期待できます。子どもたちがそのような関係を築くための黒子になることが支援者の役割といえるのではないのでしょうか。

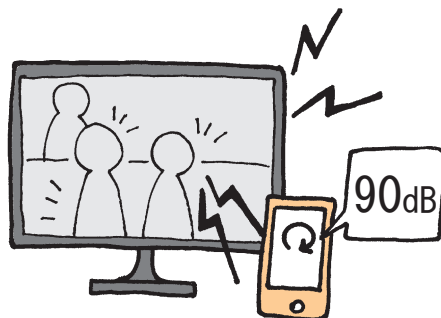
2 難聴児バディ・システムに必要な目標 | 平島ユイ子

①難聴児自身が自己の情報収集力や伝達力を知る。

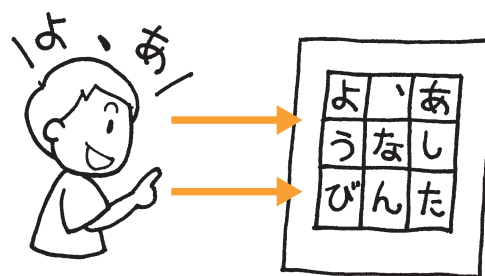
難聴児ひとりひとり聴こえの状態は異なります。また、音が聴取できる力と言葉が聞こえる力、また言葉として分かる力も異なると言えます。まず、自分のきこえの状態を知る必要があります。オーディオグラムを利用すれば、どれくらいの大きさの音がきこえるのかを知ることができます。音の大きさを表すことのできる（イラスト1）アプリが容易に手に入りますので、音声やいろいろな物音がどのくらいの大きさを調べることができます。補聴器をつけてどんな声や物音がどのような大きさで、自分に聞こえるのかどうかをご家族や友達と調べてみるといいでしょう。

〈自分の聴こえを知るゲーム〉

（イラスト2）3×3の升目を用意します。縦書きで問題を作ります。例えば、「あした、なんようび」。その後、横に文字を音声で伝え聞き取りゲームをします。先ほどの例では、「1段目、よ点（ゼスチャー）あ。2段目、うなし。3段目、びんた。」問題から答えを考えます。もし、2段目が「う・



（イラスト1）



（イラスト2）

文献

- 1) エドナ・D・コーブランド、ヴァレリー・L・ラヴ（著）、海輪由香子（訳）（2004）教師のためのLD・ADHD教育支援マニュアル。明石書店。
- 2) Bauming, N., et al. (2008) Friendship in high-functioning children with autism spectrum disorder: Mixed and non-mixed dyads. Journal of Autism and Developmental Disabilities, 38, 1211-1229.
- 3) 大井 学（2006）高機能広汎性発達障害にともなう語用障害：特徴、背景、支援。コミュニケーション障害学, 23, 87-104.
- 4) 日戸由利ほか（2017）知的発達に遅れない ASD 児者の友人関係にかんする追跡調査：地域療育センターを幼児期から成人前期まで利用した 12 事例の場合。LD 研究, 26, 464-473.
- 5) Komeda et al. (2015) Autistic empathy toward autistic others. Social Cognitive and Affective Neuroscience, 10, 145-152.
- 6) 藤野 博（編著）（2010）自閉症スペクトラム SST スタートブック。学苑社
- 7) 藤野 博・森脇愛子（編著）（2018）自閉スペクトラム バディ・システム スタートブック。学苑社。

な・い」と聞こえたとしたら、「し」の息の音が聞こえにくいことが分かります。また、このゲームを繰り返すなかで、自身の異なった聞こえ方（異聴）の傾向に気付くことができます。文では難しい場合、「し・あ・か」のように3音か4音を提示し、音の順番を変えて言葉を作るゲームも有効です。「い・あ・か」と聞こえたけど、私はシガイに聞こえるから、これは“し・あ・か”。じゃあ、アシカ」と自身の異聴を認識する活動です。

②状況によって自己の能力が有用であるときと限界があることを知る。

状況には、騒がしい場所、静かな場所、音が響く場所等があるのが分かります。雑音が大きいう言い方をしますが、雑音の大きさによって話の聞き取りやすさが異なります。自身がそのことに気付くことはもちろんですが、周りの人にも雑音がある場所では聞き取りにくいことを知ってもらいましょう。聞こえている人では聞き取れる雑音の大きさでも、難聴のある人では聞き取りは難しいのです。

③難聴によって生活上困っている事がわかる。

④自分が困っていることを相談できる相手がいる。

言葉や音がはっきり聞こえなくて困ることがあります。電子音や電子音声で何かを知らせることも増えてきましたが聴き取りにくいものです。難聴の人だけでなく聞こえる人も含めて、聞こえなくて失敗したこと、困ったことを話し合える機会が作れると良いです。目覚ましの音が聞こえないことや気づかないことは、聞こえている人も寝ているときは音に気づきにくいので、よくあります。困っていることに対してどんな工夫をしているかを出し合えるといいです。

一生懸命聴いていたのに、聴き間違えたり聞き取れなかったりすることがよくあります。言葉が聞き取れなかったことより、「ちゃんと聴いてないからよ。ちゃんと見てないからよ。」と言われると、悲しくなります。もう聞いてなんかやるものかと思ってしまいます。その時の自身の気持ちに気づき、家族や友達に聞いてもらいましょう。

エピソード

新しい補聴器を試していた小学4年生のAちゃん。鉛筆が転がった瞬間、「あれ？ 鉛筆って転がると音がするの？」と聞いてきました。「友達は鉛筆が落ちたら、聞こえたんだ。だから、すぐ拾ってくれたのか。」とつぶやきました。聞こえは、補聴機器やその調整によって変わることがあります。人工内耳をしている小学2年生のBくん。言葉の聞き取り練習を始めたところ、突然泣き出しました。「今日は、わからないんだよ。」と言います。詳しく聞いてみると、前日に人工内耳の調整を行ったばかりだということが分かりました。

調整が変わり、音の感覚が変わったのです。元の聞き取りに戻るのに何日かかりました。日常会話はことばで行いますので、一部の音が不確かでも他のわかる音から言葉をわかることができます。ですから、日常会話では音の感覚が変わったことに気づきにくいのです。



- ⑤自分が困っていることとそれを軽減できる方法がわかる。
- ⑥相手に依頼することで困難さを軽減できる。
- ⑦自分の依頼したいことを相手と調整することができる。
- ⑧困難さを軽減し成し遂げたことを相手とともに喜ぶことができる。

自分が困っていることを解決する時、自分にできることと人に依頼すべきことがあります。コミュニケーションや会話に関することは自分一人では解決することができないからです。自分が依頼したいことを周りに伝えましょう。でも、状況によってはかなわないこともあります。何ができるのかを相談して調整する必要があります。自分が考えている以外の方法を周りの人が考えつくこともあります。自分と周りの人とで、依頼したいことを折り合うことが大切です。活動後に、どんなことで分かりやすくなったのかを、周りの人に伝えることが大切です。そして、お互いに伝わりやすくなったことや分かりやすくなったことを喜びましょう。そうやって次の機会につないでいくのです。もちろん課題も出てきます。課題への対応も一緒に考えましょう。

難聴児が学校生活で出会う困った状況と軽減できる方法や協力例をあげます。

●生活全般

- ▶ 校内放送の内容が聞き取れません。スピーカーを通した機械音は肉声よりも聞きにくいことがあります。『放送があったときは、その日の日直が内容を板書する』などのクラスの協力があると助かります。
- ▶ 避難訓練では、どこで何が起こったかがわかりません。そのため、誤った判断や行動をしてしまうこともあります。命を守るために、災害時にどうすべきかを事前に伝えてください。また、周囲にいる人（先生・友だち）がどのように手助けするのも併せて考えてください。
- ▶ 昼休みには、かくれんぼと一緒にしにくい、おしゃべりがわからないとつまらない、言いたいことが伝わらなくていらだつ、ということがあります。
- ▶ 約束をしたつもりでも、聞こえていなくて約束が成立しておらず、友だちから非難されることもあります。約束は紙に書くなどしましょう。



●授業では

- ▶ 先生や友達が話していることが聞こえにくいことがあります。説明するときは、前を向いて顔を向けて話してください。板書や挿絵などがあるとわかりやすいです。
- ▶ 誰が発表者かよくわからず、口形を見るのが遅れることがあります。私が発表者だによって、手を少し長く挙げてくれると助かります。
- ▶ 発表や一人ずつの音読等、マイクを回して、遠隔補聴システムや、文字表示システム等につなげると、何を話しているのかどこを読んでいるのかわかりやすくなります。

●行事では

学習発表会や音楽発表会は、困難かと思われることがありますが、耳で聞かわりに、目で体で心で理解し、あらゆる経験をこなそうとする意欲があります。意欲の火を消さないようにお願いします。音楽を聞くこと、演奏することの楽しさ、快さを体験することができます。音楽を趣味としている難聴のお子さんもたくさんいます。

- ▶ 観客として参加する場合には、発表内容がよく聞こえないことがあります。聞きやすい（ステージの人の顔が見やすい）席の準備やステージのマイクに遠隔補聴支援システムのマイクをつけるなどして、聞きやすくする工夫ができます。また、誰かに要点をノートテイクしてもらう工夫もできるでしょう。
- ▶ 合奏は、演奏し始めるタイミングを目で見える形で示すなどすると、合わせることができる場合も多いです。歌唱は、声の質や発音、音程の聴取の難しさがあることがあります。そのことで劣等感を抱くことがないように、精神面の配慮をお願いします。
- ▶ 学習発表会で、セリフを言ったり発表したりする場合には、発音面でわかりにくいことがあるかもしれません。発表内容をパワーポイントなどで拡大して示すことで、発音面のわかりにくさをカバーすることができます。その内容に聴衆が注目できるようにしてください。

●体育では

マイクの声や音楽、笛や「すすめ、とまれ。」という合図が聞こえにくいことがあります。

- ▶ 何をするか、教室などのよく聞こえる場所で、あらかじめ教えてください。競技は、一番前だと、何をするかわからなくなってしまうから、少し後の順番がいいです。
- ▶ 運動場でどの友達と一緒に行動したらいいかわかっていると、楽に活動できます。
- ▶ 指示を、ゼスチャーやサイン、旗の動きなど目で見える方法で伝えてください。

ゼスチャーやサインを決めて!!



組み体操の時、先生が一番前で、台の上に立って手を使って、わかりやすく合図してくれて、遅れずに、行動できたので、そうしてほしい。

旗の色にも工夫が必要である。すぐ、目に付くような色がよい。黄色。白は、あんまり見えないから意味がない。

●屋外活動・社会科見学

音が反響するような、細い廊下状の場所や、工場の中のような機械の音がするような場所は、とても聞こえにくいのです。

- ▶ 説明する人の口元がよく見える場所で説明を受けられるようにしてください。また、遠隔補聴システムを使用するなどして、雑音の影響を少なくすることができます。説明の内容がわかるパンフレットなどの資料があると、それを見て内容がわかります。そばにいる人に話の内容をノートなどにメモしてもらえると、もっとよくわかります。
- ▶ 屋外での見学時、雨が降ってきたり、暑さのために汗を多量にかいたりする場合、補聴器は水気に弱いのでぬらさないように留意する必要があります。

⑨自己が主体となり相手とともに次の目的に向かうことができる。

自分から困っていることもできることも発信する必要があります。何も言わないと、周りの人は困っていないと考えてしまいます。相手もあなたと一緒に考えることでたくさんの学びがあります。

⑩難聴による困難さを意識せずに関われる相手がいる。

⑪難聴に関係なく忌憚なくかかわろうとする相手がいる。

いろいろなことを一緒に考え楽しめる相手とは、いつの間にか難聴のことを忘れ関われます。ことばを超えた内容を共有することを楽しんでいるからです。



22歳の難聴の先輩から

小学校の高学年のときよく友達とけんかし、友達は嫌いだと思い、なんで難聴の自分のことをわかってくれないのだろうとずっと思ってきたけど、自分が一番わかってなかった。今だったら、周りの子がなぜそんな態度をとったのか、わかるような気がする。「聞こえないなら、聞こえないって言えよ。」「なんで、こんなことするんだよ。」という子をいじわるだと思っていたが、一番自分のことを考えていてくれてたのかもと思える。

自分の得意なのは「そうさくダンス」と言ったつもり。盗むゼスチャーをして「盗作ダンスなの?」と尋ねた。みんなそう聞こえるから変な顔してたんだ。自分の発音が不明瞭なのでわかったふりをしてくれてたのかもしれない。「なんで、そんな変な顔するの? なんて聞こえたの?」って、自分から聞けばよかった。



ASD 児におけるバディ・システム

青山学院大学 森脇愛子

ASD のバディ・システムを取り入れた私たちの活動は、出席とスケジュールの確認をしたら、すぐに『バディ遊び』の時間から始まります。数組のバディは、それぞれ部屋に入るやいなや、“おきまりの”流れで遊びを展開していきます。並んでお絵描きをするバディ、ブロックの電車と宇宙空間を作るバディ、2人でクロスワードパズルやコマ撮りアニメに挑戦するバディ…遊びの中身は好みに合わせて子どもたち自身が選んだものです。同じ発達段階の子どもたちに観察されるような長い会話ややり取りというのは、ASD バディにおいてはそう多くは見られません。協同的な遊びで楽しむというよりは、時間いっぱい個々の遊びに没頭している場合もあります。でも、周りを気にしたり、無理に複雑なコミュニケーションをすることもなく、ただ少しだけバディを意識したり意識されながら、自由に居心地のよい空間と距離感を共有できる……そんな時間が何よりも子どもたちのお気に入りなのです。

活動中には、1 バディに 1 人の見守り役（＝支援者）が付きますが、何かヘルプが必要になるとそっと登場して、環境調整や 2 人の間の橋渡しをします。大切なことは、バディの安全や安心が保障されるようにすることと、最小限の手助けでお互いの関心や想いを届け合えるようにすることです。いわゆるソーシャル・スキルを学ぶ時間もありますが、どんな場面・どんな人にも使えるスキルよりも、“自分のバディと、今よりもちょっといい関係になれるスキル”を取り扱います。特定のバディと一緒に学び、練習することで、遊びや会話のなかで自然とスキルを使う場面も増えていきます。バディに会えばほっと安心したり、バディが休めばお手紙を書いたり、繰り返し遊びのなかで“おきまりの”パターンが作られていく頃には、情動的な関係性への変化を徐々に感じるすることができます。

約 1 年間のセッションの終盤、並んでそれぞれ好きなお絵描きを楽しんでいたバディは、いつしか 2 人の絵がだんだんと近づき繋がって、ひとつの街が描かれました。クロスワードパズルを楽しんでいたバディは、2人で作ったオリジナルの難しい問題を支援者に見せては弾ける笑顔で喜んでいました。バディ・システムには難しい仕組みや支援方法は必要ありません。ASD の子どもたちのペースや感じ方が大切にされ、その子らしい自然な姿で、仲間との関係性をじっくりと育てていきたいものです。



バディ・システムの導入

1 全体の流れ | 竹森俊之

(1) 先行する個別支援

難聴のある子どもに対しては、教育・医療・福祉の場（難聴通級指導教室や難聴特別支援学級、耳鼻咽喉科、児童発達支援や放課後等デイサービスなど）で個別支援が行われています。子どもの難聴の程度や種類は様々ですが、一人一人の実態と必要に応じた支援が行われています。この個別支援は、子どもの成長・発達に応じて内容を変えて継続していくことになります。

難聴のある子どもへの最も基本的な支援は「会話支援」（詳細は後述）です。個別支援の場面で会話支援を丁寧に行うことで、子どもにとってうれしい会話をたくさん体験させることができます。受け身的な会話から主体的な会話へ、一方的な会話から相手を意識した双方向的な会話に変化することが期待されます。子どもの主体性や協調性が育ち、交友関係を広げる（バディ・システムの）準備ができていきます。

(2) バディ・システムの導入

個別支援の場では大人を相手に主体的に関わることができるようになってきた子どもでも、通常の学級のような集団で仲間を作ることが難しい子どももいます。そのような子どもが、「子ども同士の関わり」を体験しやすいように子ども二人だけの場面を用意するのが「バディ・システム」です。

また、子どもによっては、新しい場面に慣れにくかったり、人との関わりに不安を感じやすかったりする傾向が強いことがあります。個々の子どもに対応した準備が必要です。

個別支援を進めて、以下のような様子が見られれば、バディ・システムの導入を検討します。

- ▶ 安心感や人への愛着・信頼がある。
- ▶ 物だけでなく、人にも興味をもてる。
- ▶ 支援者に対して要求や拒否ができる。
- ▶ 支援者と落ち着いて会話できる。



(3) バディ・システムと個別支援のバランス

個別支援とバディ・システムによる支援は、それぞれの目標・計画に沿って進められます。しかし、それぞれの進み具合によっては、計画を柔軟に変更していくことが大切です。個別支援とバディ・システムのバランスについても、子どもの状態を見てバディ・システムの割合を増減させたり、あるいは中断したりと、柔軟に対応します。

情報収集をしよう

1. 子どもに関する情報をあつめる

バディを組んでみよう

1. 効果的にバディを組むために
2. 実際のバディの組み方について

評価をしてみよう

1. バディ・システムの具体的な評価内容
2. 実際のバディとの活動における評価 ～事例を通して

バディ・システムの実践

1. 会話支援
2. 個々の子どもに対応した準備
3. 支援者の心構え
4. 活動場所の設定
5. 4つのアプローチ方法
6. フェーズごとのアプローチ方法

バディ・システム FAQ

—こんなときどうしたらいい?—

2 情報収集をしよう | 倉島 楓



①子どもに関する情報をあつめる

まず、バディに参加する子どもたちの様子を把握しましょう。

下表にある項目を参考に、子どもの基本情報を整理しておきます。

	記入日（ 年 月 日 ）機関（ ）記入者（ ）
（フリガナ） 氏名	性別
生年月日	年 月 日 現在の年齢 才 か月
主訴	
本人の希望	
保護者氏名	家族関係
保護者の希望	
発達歴	出生時の様子 乳幼児健診の経過 相談の開始 療育の経過
教育歴	現在の所属（学校・学年、担任） 転出入などの経過、通級などの利用 教育歴 教育の内容：特別支援教育、個別支援計画、個別指導計画 現在の適応状況：出席日数、学習成績 （学習面 / 生活面 / 身体・運動面 / 対人面 / 精神面） 教員や学校との関係など
聴力について	人工内耳 右・左・両耳 補聴器 右・左・両耳 人工内耳・補聴器調整の頻度 回 / 年、月 補聴した状態での聞こえ dB ロジャーの使用 有・無
コミュニケーション	身振り 手話 口話 発音しにくい言葉、行など
学校	通常学級・支援学級・難聴学級・その他（聞こえの教室など） ティームティーチャー 有 / 無 席の配慮 有・無
治療歴	担当科（主治医） 初診年齢・経緯 診断名 検査結果 服薬状況
社会サービス利用	医療（通院の頻度、服薬・医療費補助の利用） 福祉（手帳・デイケアなど）
関係者	教育（校長、担任、特別支援コーディネーター、通級担当者、ほか） 医療・福祉（主治医、リハビリ、心理・言語・作業、ほか） その他（習い事、地域サービス担当者、ほか） ※連携が取れるかどうか、ニーズがあるか、連絡先など

学校や病院では、すでにこれらの情報に関して管理されている場合があります。

必要な項目については各施設に確認されるとよいでしょう。

フォーマットはそれぞれの施設にあるものでも十分です。

検査

基本情報のほかにも、過去に行われた心理検査や評価の情報は、バディ支援前に保護者や学校・病院から聞き取り、整理しておくといでしょう

		対象年齢
■知能・認知発達	ウェクスラー式知能検査 WISC	5 歳～ 16 歳 11 か月

■ALADJIN	総合的な言語発達		
	言語による学習習得度	教研式標準学力検査（国語・算数）	小 1 ～ 6 年生
	語彙の発達		
	理解（基本的語彙）	改定版絵画語い発達検査	3 歳～ 12 歳 3 か月
	理解（抽象的語彙）	標準抽象語彙理解力検査	小 1 年生～
	統語（構文）		
	理解	失語症構文検査	およそ 3 歳～（9 歳以上では天井効果あり）
	産生		
	言語発達に影響する能力		
	発達性読み書きスクリーニング	小学生の読み書きスクリーニング検査	小 1 ～ 6 年生
知的発達障害スクリーニング	レーヴン色彩マトリックス検査	5 歳～	

■聴力検査	・標準純音聴力検査
	・補聴器適合検査
	・雑音下での言葉の聞き取り検査 （60 ～ 70dB 程度のノイズ下）

※必要に応じて保護者に関する情報（育児不安、メンタルヘルス面）も参考になります。
また、検査項目は、各施設で異なる場合があります。

新たな情報提供を依頼するときには

・インフォームドコンセント

保護者に（可能であれば本人にも）その情報利用の目的を必ず説明して同意を得る必要があります。
また情報提供や新たな評価を受けたくない場合は拒否や中止をできること、その場合にも不利益がないことを伝えます。

・フィードバック

保護者と本人の希望を確認したうえで、得られた情報、評価の結果からわかることをまとめて、説明します。

・個人情報の保護

アセスメントで得られた個人情報の保管は厳重に行います（各機関の基準と管理方法に基づくこと）。

原則的に個人情報の授受には保護者（可能であれば本人にも）の同意や了解が必要です。

書面で確認しておくこともよい方法です。

特に支援に関係する第三者への情報提供や共有の際は慎重に行います。

保護者の了解が得られた場合も“集団守秘義務”のルールに則り、共通理解のもとで情報を取り扱います。

参考文献

- ・自閉症スペクトラム バディ・システム スタートブック 仲間づくりとコミュニケーションの支援 学苑社 [編著] 藤野博・森脇愛子 / [イラスト] 袖山慶晴
- ・感覚器障害戦略研究 聴覚障害児の療育等により言語能力等の発達を確保する手法の研究 聴覚障害児の日本語言語発達のために～ALADJINのすすめ～ 公益財団法人 テクノエイド協会

3 バディを組んでみよう | 小木原弘晃

(1) 効果的にバディを組むために

難聴の子どもたちが実際にバディを組んでいくにあたっては、色々な要素を考慮に入れながら効果的に組んでいく必要があります。バディを組む際の考慮すべき要素には、年齢（学年）、性別、聴力、補聴手段など、様々な点が考えられます。

以下、効果的にバディを組むために必要な、主な要素をいくつか取り上げます。

～バディを効果的に組むための要素～

要素	考えられる効果
①学年	・同学年（近い学年）のバディだと話題を共有しやすく、親近感がわいて関わりを深めやすい。 ・異学年のバディでは、上級生は下級性に気を配りながら関わり、下級生は上級生を頼って活動をするなど、相乗的な効果が期待できる。
②性別	・同性だと興味、関心や遊びが共通することが多く、関係を深めていきやすい。特に、小学校高学年以降は、気兼ねなく関わりをもつことができる良さもある。 ・異性の方が気楽に関わることができるというケースもある。特に低学年では、異性の遊びの方を好むことがある。（例：男の子がままごとを好んで行うなど…）
③補聴手段	・人工内耳や補聴器など、同じ補聴手段の子ども同士だと、親近感をもって関係を深めやすい。同じ者同士だという気持ちを持ち、仲間意識がしやすい。 ・補聴手段が違う子どもとのバディでは、同じ聞こえにくさを抱えた、様々な子どもたちがいることが分かって視野が広がり、仲間意識を感じやすくなる。
④興味・関心	・同じことに興味・関心をもつ子どもだと、共通の話題で盛り上がることができ、早期に関係を築き、関係を深めていくことができる。 ・違う興味・関心の子どもの場合は、自分の関心のないこと、知らないことを知ることができるなど、新鮮な関わりを期待することができる。
⑤居住地域	・同じ地域の子どもの同士だと、親近感がわきやすく、地域の話で共通の話題などもあり、関係を深めやすい。 ・違う地域の子どもの場合は、自分の地域にはないこと、知らないことが分かるなど、新鮮で発見的な関わりが生まれる。

※①～⑤はバディを組む際の要素として、優先度の高いものから順に記載しました

上記のように、効果的にバディを組むための主要な要素を、いくつか取り上げてまとめてみましたが、この他、子ども同士の性格面を含めて“相性”という視点もとても重要になってくると思います。例えば、片方だけが楽しくて、もう一方が我慢しなければいけないという関係は、良い関係とは言えません。さらに、「この2人はよい関係になるんじゃないかな!」「この2人は合わないだろう。」などという、支援者の見立ても重要な要素となります。



このようなことを複合的に考え合わせながら、バディを組んでいくことが大切になります。また、実際にバディを組んで、活動の回数を重ねることで見えてくる部分も多いと思います。2人の間によい関係が築かれていくことを願いながら、まずは取り組んでみるのがよいのではないかと考えます。

(2) 実際のバディの組み方について

実際に難聴の子どもたちがバディを組んで、活動していくために、どのようにバディを組んでいくかについて、私が通級指導教室で取り組んだ、ペア活動の事例をもとにしながら見ていきたいと思います。

以下、子どもたちをAくん、Bくんとして事例を取り上げていきます。



実際のバディの組み方について～事例を通して

Aくん

年齢：小学校4年生 性別：男 興味、関心：野球が好き、ポケモンなどゲームが好き

聴力：右耳 81dB、左耳 83dB（両耳高度感音性難聴） 補聴手段：両耳補聴器

学校生活の様子：学校では友達に自分の気持ちを伝えることがなかなかできない様子があります。困ったことがあっても、そのまま黙って我慢していることも多く見られます。

個別支援の様子：自分のやりたいことを支援者に伝える姿がありました。支援者をからかって楽しんだり、おどけてみせたりするような様子も見られました。

Bくん

年齢：小学校4年生 性別：男 興味、関心：アニメやゲームが好き、調理が得意

聴力：右耳 110dB、左耳 10dB（片耳聾） 補聴手段：クロス型補聴器

学校生活の様子：学校では控えめな感じで、なかなか自己主張をすることができない様子が見られます。嫌なときなども、自分の意見を言うことができず、友達の言いなりになってしまうことが多かったです。また、自分から関わることに諦めてしまう姿もありました。

個別支援の様子：学校や友達に対する愚痴を自分のことばで話す様子が見られました。アニメの話になると、支援者に生き生きと話の内容を説明したり、楽しいところを伝えたりする姿がありました。



なぜバディを組んだのか？

小学校4年生で、小学校生活も残り半分です。どちらも、同じ学年の難聴の仲間がいませんでした。中学校進学後はもちろん、将来的にも付き合っていくことのできる同障の仲間として、関係を深めていってほしいという願いがありました。お互いに補聴器を装着していたので、「補聴器を着けているのは僕だけではない！」という安心感が高まり、仲間意識を強くもつことができました。また、お互いにゲームが好きところが共通点だったので、共通の話題として関係を築いていく上でのきっかけになるのではないかと考えました。

そして、お互いに学校生活の中で自分の思いを伝えていくことに難しさがあるようでしたので、安心した環境や関係の中で、自分の思いをバディに伝えることができるようになってほしいと考えました。

※もう1つの理由として、保護者同士もバディとして関係を深めながら、気軽に話をしたり、悩みを相談し合ったりできる関係を築いていってほしいと思っていました。

上述のように、支援者の思いや願いをベースに、それぞれの子どもを多角的な視点から見て効果を考えながら、バディを組んでいくことが重要になってきます。

1回だけの活動ではバディとの相性などを含め、分からない部分が多々あります。何回か回数を重ねることで、子どもたちのことを理解できてきたり、バディとの関係が少しずつ構築されていったりしますので、継続的に支援をしていく姿勢が必要です。また、一方でバディとの関係がなかなか上手くいかない時もあるかもしれません。その際には、改めて個別の支援で担当者との関係を深めていったり、新たなバディと組み直したりするなど、柔軟な視点も求められます。

まずは、バディを組んで活動を始めてみましょう！

日時の設定も考慮に！

AさんとBさんは、個別の支援も同じ曜日に設定していました。Aさんが最初に来て個別支援、その後にBさんが来て、二人で活動をします。Aさんが帰った後、Bさんと個別支援という形で組んでいました。(個別A→バディ→個別B)

日時の設定例

曜日：水曜日

Aさん（個別） 14：30～15：15

バディとの活動 15：15～16：00

Bさん（個別） 16：00～16：45

4 評価をしてみよう | 小木原弘晃

(1) バディ・システムの具体的な評価内容

バディ・システムが、二人で相互に働きかけ合いながら、お互いのペースで少しずつ仲を深めていくというように、人間関係の形成において有意義なものとなるためには、バディとの活動を「関係」「会話」という二つの側面から振り返って評価をしていくことが重要になってきます。以下、バディとの「関係の相互性」、「会話の相互性」という二つの面における評価内容を段階的に記載しました。

	評価内容
関係の相互性	① バディと同じ空間にいることができる。 ② バディと同じ空間で活動することができる。 ③ バディの方に関心を向けて見る様子がある。 ④ バディの方に関心をもって近づいていく様子が見られる。 ⑤ バディと一緒に同じ活動を楽しむことができる。 ⑥ バディと目的をもって活動に取り組むことができる。 ⑦ バディと活動を創造し、意欲的に取り組む姿が見られる。 ⑧ バディと話し合いながら、活動を進めていくことができる。 ⑨ バディと相談して活動内容を決めたり、役割分担をしたりして活動することができる。 ⑩ バディと相談をして、次の活動を計画することができる。
会話の相互性	① 支援者がバディに向けて話したことを聞いたり、自分の関心のあることを支援者に向けて話したりすることができる。 ② バディの話に関心を向けて聞き、自分の興味関心のあることや知っていることを、バディに向けて話すことができる。 ③ 支援者のサポートを受けながら、バディに質問をしたり、バディに質問されたことに答えたりしながら、楽しく話することができる。 ④ 自分からバディに聞いてみたいことを質問したり、バディが答えることを聞いたりして、やり取りをしながら話題を深めていくことができる。 ⑤ 自分の思いや考えを伝えるだけでなく、バディの思いや考えを聞き入れて、身近な物事について話し合っていくことができる。

※「関係」、「会話」の二側面から評価の観点を段階的に記載しました。

バディ・システムを評価していくにあたって…

上記の評価内容に照らし合わせながら、バディとの二人の「関係はどうか?」、「会話はどうか?」ということを視点に、常々活動を記録し、定期的に評価をしながら段階的に進めていくことが大切です。評価においては、まず、支援者の感じたことなど、支援者自身の評価が大変重要になります。また、同僚と行うケース会議や子どものことを取り上げた雑談の中での、第三者的な評価も必要になります。さらには、保護者による評価も大事な位置づけとなります。



(2) 実際のバディとの活動における評価 ～事例を通して

前項「バディの組み方」のところで取り上げた、A さんと B さんの活動事例の一部をもとに、バディ・システムの評価について見ていきたいと思います。

●活動初期の関わりの様子

- ▶ 初めは、お互い緊張があり、どのように関わって良いかという不安の強い様子が見られました。
- ▶ 活動は、お互いに同じ場にいるものの、一緒に活動するという感じではなく、各々が好きなことをやろうとする様子がありました。
- ▶ A さんは自分の好きなことをどんどんやろうとして、自分のペースで話を進めていきました。B さんは、どこか冷めた感じで、あまり関わっていかうとしない感じでした。B さんは、「ぼくはいいや」と、A さんと支援者が活動しているところをボーッと見ている感じでした。

支援者からの評価

- ・まだ、活動の回数を重ねていないので、お互いが一緒に空間にいることに安心感がないように感じられる。それぞれが、自分の好きな活動をしていても良いので、まず一緒に空間にいることが心地良いと思うところから進めていく。
- ・A さんは自分の考えを伝えているが、B さんに伝わるように整理して分かりやすく伝えることが求められてくる。個別支援の中で、支援者とことばでやり取りをして分かり合う経験を重ねることが必要だろう。
- ・B さんは物事に興味関心のない様子があり、自分から思いを伝えていくこともほとんどない。まず、支援者との個別の関わりで、B くん自身が興味・関心のあることに支援者と一緒にじっくり取り組んでみたり、その中で自分の思いを伝えたりする経験が必要になるだろう。

ケース会議での評価 ＊仲間の先生からのコメント

- ・バディとの活動と並行して、個別の支援で支援者との間で経験を重ねることが必要である。
- ・個別支援の中で、Aくんは興味関心のあることを話題として、自分の考えなどを伝えるとともに、支援者の話も受けながら、やり取りをすることが求められる。
- ・Bくんは、楽しいことやうれしいこと（時には悲しいこと）など、個別支援の中で支援者と気持ちを共有しながら物事に取り組んでみるのが大切になる。
- ・バディとの活動は、同じ空間で活動することに安心したり、楽しんだりすることに重点を置くのが良いのではないか。

Aくんの保護者の思い

同じ学年ですし、2人が仲良くなってほしいです。Bくんは優しい感じの子なので、わりと気が合うのではないかと思います。2人で仲良く活動してほしいです。

Bくんの保護者の思い

Aくんと一緒に活動させてもらえるのは、すごく貴重な機会です。2人で楽しく色々な経験をしてほしいと思います。

評価をもとに
取り組みました！

取り組みメモ

Aくん(個別) …… 支援者との相互のやり取り
Bくん(個別) …… 支援者と共同活動、気持ちの共有
バディとの活動 …… 空間の共有、安心感を生む
バディへの意識の強化



バディとの関わりの変容

- ・2人の好きな「ポケモン」を題材に、好きなキャラクターのことを話したり、ポケモンカルタを一緒にやったりするようになりました。
- ・支援者のサポートを受けながら、「(ポケモンの)好きなキャラクターは何？」と質問をしたり、「ぼくはピカチュウが好き」「(理由は)進化したら無敵だから」と答えたりする姿が見られるようになりました。

子ども自身の感想も大切です！

子どもが、バディとの関係を自分事として認識し、関係作りを進めていくためにも、子どもにバディとの活動のことを聞いたり、簡単なアンケートに答えてもらったりして振り返るなど、子ども自身の主観的な評価も大切になってきます。



担当者：「〇くんと一緒に活動したけれど、どうだった？」



Aくん

Bくんと遊ぶのは楽しかった。ポケモンの話がいっぱいできてよかった。

Bくん

Aくんとポケモンの話ができた。今度は、一緒にポケモンカルタをしたい。

※個別支援の場で、バディとの活動のことを聞きました。

バディとの感想アンケート（例）

1. Aくんと、ポケモンの話をしたり、ポケモンカルタをしたりして楽しかったですか。

すごく楽しかった 楽しかった どちらともいえない 楽しなかった ぜんぜん楽しなかった

--	--	--	--	--

2. Aくんと、遊んだり、話したりした中で、特に楽しかったことは何ですか。

3. 今度 Aくんと何をして遊んだり、話したりしたいですか。

バディ・システムを多面的に評価していきましょう！

これまで述べてきましたように、バディとの関係をスモールステップで築いていくためには、支援者を中心としながら、広い視点でバディとの活動を評価し、そのことを次の活動に生かしていくということが、とても大切なことだと考えます。「関係」「会話」の側面から評価をして、バディ・システムを進めていきましょう。



きこえの教室からバディ・システムを伝える大切さ

小木原弘晃

きこえの教室（難聴通級指導教室）に通う子どもたちは、通常の学級に籍を置き、普段はその学級で授業を受けています。そのため、在籍しているクラスの子どもの関係作りということがとても重要になってきます。そこで、きこえの教室からバディ・システムの意義や効果を発信していくことが、とても重要だと考えます。

以下、私が担当している子どもの事例を取り上げながら、きこえの教室担当からバディ・システムを発信することの大切さを、流れに沿って見ていきたいと思います。

Cさん：小学校5年生、女子、両耳人工内耳

自分から積極的に友達に話し掛けていく様子が見られるなど、割と社交的なタイプです。ただ、自分の思いや考えを押し通すことが多く、相手の意見はあまり受け入れない感じがります。



【学級担任との共通理解】

学級担任

Cさんは話し合いの時など、友達が言ったことを、取り入れることが難しいことが多いです。

Cさんが、自分勝手だと思われたい、付き合いにくい人だと思われたい、友だちが近寄っていかなくなっても困りますし。

そうなのですか。やっぱり聞こえにくさが、そのことが関わっているんですね。

確かにクラスでも、1対1でやり取りをしている時の方が、うまく話をできている感じがします。

そうなのですね。Cさんは、今そのことを学んでいて、そのような段階ということなのですね。

それは素敵なことです。クラスでも少数での関わりの機会を作っていきたいです。

きこえの教室担当

そうですね。自分の考えはどんどん伝えられますが、友だちの意見に耳を傾けるといところは希薄な感じがりますね。



そうですね。友だち関係作りにおいて、Cさんが学んでいかなければいけないところですね。

友だちの言ったことを聞いて、正しく理解して話し合っていくという経験は不足していると思います。友達の言ったことを部分部分で聞いて、とらえていることが多いと思います。

1対1なら話をしやすいでしょうが、複数人での話となると、誰が話しているかが分かりづらく、話題もつかみにくいんですね。



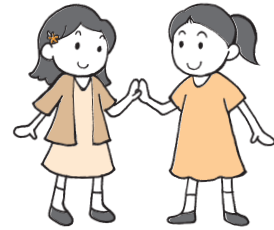
きこえの教室でも、私との個別の関わりや、特定の仲間とペアで関わる中で、関わり方を学んでいる途上なのです。

それでも、特定の仲間と関わる機会を作っていると、「～さんが喜んでくれると思うから～を作りたい」など、誰かのためにという気持ちが出てきているように思います。



【学級担任へバディ・システムの紹介】

仲間との関係づくりをしていくために、特定の決められた子どもと2人1組で、活動をしていきます。その中で、相手（バディ）への信頼や絆を深めていきます。関係作りを学んでいる途上の子どもたちに、有効かもしれません。



バディ・システムに対する学級担任のコメント

特定のバディを決めて活動するのは、人間関係を作ることを学ぶ上で、とても良いように思いました。Cさんだけでなく、1対1で関わる中で、関係作りをしていくことが必要な子どもがクラスにはたくさんいます。Cさんにとっても良いかもしれないけれど、クラスのみんなにとっても良い効果がありそうですね！

【学級でバディ・システムに取り組む】

●実際にバディを組む

- ・性別 ・性格 ・日頃の関わりの様子 ・座席位置

※上記の点を考慮に入れて、学級担任の見立てで組み方を決めました。

Cさんのバディ：Cさんは、割と気軽に話すことのできる女の子とバディ組むことになりました。少し不安など気持ちが不安定なことがある子のような子でした。Cさんの明るさや気さくさなども、考慮されたようです。

●バディと活動する具体的場面

- ・授業に入る前に身の回りの整理整頓ができているかを、バディと確認し合います。
- ・算数で分からないところをバディと教え合ったり、確認し合ったりします。
- ・授業の中で相談したり、話し合ったりする際に、初めはバディと一緒に話し合うことを基本とします。
- ・体育の授業で、2人組で活動する時はバディと一緒にいきます。

バディ・システムを取り入れてみて学級担任が感じたこと

Cさんは、バディに困っている様子があったら、気になって自分から近くに行き、「どうしたの？」と声をかけて気遣う姿がありました。明らかにCさんには、他者意識が出てきて、相手に気を配る姿が見られるようになったと感じます。また、クラスのみんなも思いやりの気持ちが高まってきたように思います。

きこえの教室は、個別支援の場であり担当者との関係作りからバディとのペアでの活動、小集団の活動と仲間作りなど人間関係の形成について体系的に経験して学んでいくことができます。一方、きこえの教室に通う子どもたちの学びの中心となる、在籍の学級は大きな集団の場であり、ただ、その中でバディ・システムを導入するなど、個別的な関わりを作ることで、学級の中でも仲間との関わりを深めていくことができると良いと思います。

きこえの教室に通う子どもたちが、仲間との関係を作っていく経験を充実させていくためには、きこえの教室でのバディとの活動とともに、在籍の学級でもバディと関係を作っていく経験が必要だと考えます。きこえの教室からバディ・システムを伝え広げていくことが大変重要となります！

IV

バディ・システムの実践

1 会話支援について

(1) 難聴のある子どもへの基本的な支援

バディ・システムを導入前の準備段階（個別支援）において、また導入後においても、難聴のある子どもへの最も基本的な支援が「会話支援」です。難聴があるために人と会話することが苦手で不安のある子どもが、会話することが楽しみ、うれしいと思えるようになることを目指す支援です。自由会話、遊び、検査、学習など、全ての支援場面において共通して取り組みます。

「会話支援」には、「子どもの理解を助ける支援」と「子どもの思いを受け止めて返す支援」の二つの側面があり、これらを同時並行して行います。子どもにとっては、相手の話した内容が「分かる」とこと、自分が話した内容を相手が分かってくれたと「分かる」ことの、両方の「分かる」が大切です。

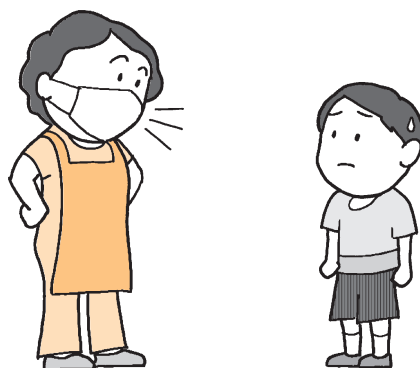
(2) 子どもの困難さを理解しよう

補聴器や人工内耳が大変進歩したため、子どもが会話している様子を見ると、相手の声が聞こえているように見える場合があります。しかし、音声の全てが聞き取れているわけではありません。音声の中の母音は聞き取れている場合が多いですが、子音は状況によって聞き取れたり聞き取れなかったりしています。

実際の会話では、ことばとして正確に認識できたり、曖昧に認識したり、間違えて認識してしまったり、認識できなかったりと様々です。そのため「聞こえていても分からない、聞き間違える」ことがあります。

さらにうまく認識できないことを、自分で気づけるとときと、気づけないときがあります。相手から見ても子どもがどう認識しているかは分かりにくく、お互いに分かり合えているかどうか分からない、不確かな状態になります。

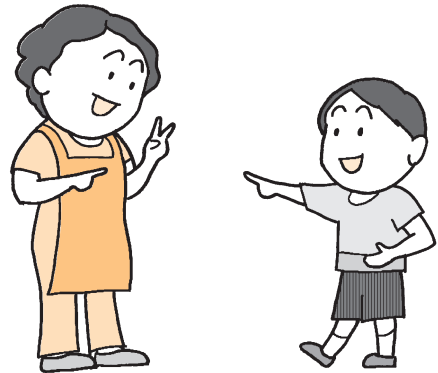
そのため子どもは、人と会話することを不安に思ったり、苦手にしたりしています。しかも、これらの聞き取りにくさや会話しにくさを周りの人に理解してもらうことが難しく、協力も得にくく、人との関係も弱くなりやすいのです。



(3) 人との良い関係が会話を支える

ただし、子どもの身近に、「聞こえにくさを分かってくれる人」や「分かりやすく話してくれる人」「話したことを分かってくれる人」がいるなど「人との良い関係」があると、子どもは会話をしやすくなります。子どもが会話をする中で相手としっかり分かり合えた。そんなうれしい会話体験をすると、子どもはもっと会話をしたいと思う「内発的動機」が起こり、さらに良い会話体験を重ねるといふ好循環が始まります。

良い会話体験をたくさんするほど人との関係も強化されます。もし会話が通じにくい状況になっても、人と会話することを諦めず人とのつながりを保ち、孤立しにくくなると考えられます。大人は子どもたちへ「人と会話すると嬉しいことがある」ことを会話体験を通して伝えていくことが大切です。



(4) 会話の中で子どもの理解を助ける支援

一つ目の支援は、支援者が話した内容を子どもが「分かる」ように、理解を助ける支援です。子どもの「聞き取る力」を生かしつつ、「聞き取りを妨げる要因」を少なくし、「目で読み取る力」も生かして理解を助けます。

- ▶ 「聞き取る力」は、補聴器や人工内耳によって補われます。その効果には限界があり、聞こえにくさは残ります。「聞き取る力」をより良い状態に近づけるため、また突然の故障や聴力の低下などに対処するために、日頃の聞こえのチェックや、機器の調整を見直していくことが大切です。
- ▶ 「聞き取りを妨げる要因」には、話し手の声が小さい。距離が遠い。話し方がはっきりしない。早口で話す。聞こえにくい耳の側から話す。周りの騒音や反響音が大きい。複数の相手が話すなどがあり、できるだけそれらの影響が少なくなるように工夫します。
- ▶ 「目で読み取る力」には、会話の内容を口の動きや表情から読み取る。文字や字幕から読み取る。手話から読み取る、などがあります。子どもの実態に合わせて活用します。



●準備（環境整備）

静かで明るい部屋を用意します。話し掛ける方向や位置にも気をつけます。左右どちらの耳が聞こえやすいか、支援者の顔が明るく見やすいか等を考慮します。会話を文字化する道具として、紙やホワイトボード、タブレットなどを用意します。さらに、子どもの聞こえに変化がないか観察し確認します。

●会話の中で気づいたら対策を試す

支援者は、子どもに話し掛ける度に「今は聞き取れたかな？ 分かったかな？」と反応を観察し、以下のような様子に気づいたら対策を考え試してみます。例えば、

- ▶「こちらに気づいていない」様子だったら、合図を送り、目が合ったタイミングで話し掛けてみます。
- ▶「聞こえなかったかな」と気づいたら、声の大きさや話す速さを調整してみます。
- ▶「分からなかったかな」と気づいたら、繰り返し話したり、文字に書いたり、手話で話したりします。
- ▶「聞き間違えたかな」と気づいたら、どのように受け取ったかを確認してみます。
- ▶「話題をつかめていないかな」と気づいたら、「今、〇〇〇〇の話をしているよ」と伝えてみます。

うまく理解できない理由は、その瞬間その瞬間で違います。子どもの様子をよく観察して、その時の状況に合った対策を試すことが最も重要です。このようにして、難聴があるため曖昧な理解になりやすい会話を、より確実に理解できる会話へ近づけるように支援します。

(5) 子どもの思いを受け止めて返す支援

二つ目の支援は、子どもが話した内容を、支援者が分かってくれたと「分かる」ようにする支援です。子どもが発する全てのことを大切に受け止め、やり取りの一つ一つを丁寧に会話をします。たわいない会話も大切に聞きます。どのような伝え方でも大切に受け止めます。

子どもの話を聞くときには、子どもの様子をよく見て、よく聞いて、伝えたい思いを読み取って、分かったことを子どもに伝え返していきます。「あなたが言いたいことは、こういうことね」という気持ちで返します。不完全な日本語になっているときは、より正確な発音にして、より適切な表現にして音声で返します。または文字に書きます。その後の反応を観察します。



伝え返すことで、子どもは「分かってくれた」と安心し、うれしくなります。また支援者のことばを聞いて「そう言えばいいのか」と発音や話し方の学習をすることにもなります。

このように分かったことを復唱して相手と確認する習慣を支援者がやって見せて、子どももそれをまねして、お互いに大事なことは「復唱確認」する習慣ができるとなおいでしょう。

どのような話題で会話するかも重要です。子どもの心に届くうれしい話題が望ましいです。そのために、子どもの興味関心や心の有り様など、子どもを理解することが大切になります。子どもを理解していると良い会話ができ、良い会話ができるとさらによく理解できるようになります。

(6) 主体性や協調性が育ちバディ・システムの準備ができる

支援者は、この二つの支援を通して、その子の「聞こえにくさ」と「伝えたい思い」を理解しようと努めます。これらの理解をもとに「丁寧な会話」を心がけます。

これらの支援によって、子どもの意識が次のように変化することを期待します。「会話は分からない、つまらない」という意識から、「分かる、うれしい」という意識へ変化する。支援者を、安心して話せる相手として信頼するようになる。もっと会話したいと思うようになる。受け身的な会話から、主体的に会話しようと変化する。一方的な会話から、相手を意識した双方向の会話に変化するなどを期待します。

まとめると、主体的で協調的な会話体験ができることを目指します。人との良い関係の中で、うれしい会話体験をたくさん体験することで、子どもの主体性や協調性が育っていき、仲間作りの（バディ・システムの）準備ができていきます。そして、孤立も回避しやすくなると思われます。



● 支援者側の課題

子どもが「この人なら分かってくれる（人との良い関係）」、「この人ともっと話したい（内発的動機）」と思えるように、支援者は「障がい理解」や「子ども理解」を深めるとともに、支援者自身の「会話力」を磨いていくことが課題になります。

2 個々の子どもに対応した準備

バディ・システムが子どものためにうまく役立つためには、個々の子どもに対応した準備が大切です。子どもの側から見て、以下のような準備ができると効果的です。

- ▶ 安心して、落ち着いて過ごせる。
「何されるんだろうって心配しなくていい」「ここなら大丈夫」
- ▶ 部屋にも遊具にも慣れていて、見通しが持てる。
「ここにずっといたい」「つぎ、あれやりたい」
- ▶ 好きな遊具や、興味関心をもてる活動がある。
「ジェンガ、大好き」「今度はトリケラトプスの絵を描くぞ」
- ▶ 先生と話しやすい。分かりやすいし、分かってくれる。
「先生の話す速さがちょうどいい」「ちゃんと話を聞いてくれる」
- ▶ 聞こえにくさを補ってくれる準備（情報保障）がある。
「必ずこっちを向いて話してくれる」「ホワイトボードにすぐ書いてくれる」

このような準備ができるためには、個別支援の段階で、前項の「会話支援」を丁寧に行い、子どもと支援者の間で、分かり合える良い関係ができていることがまず大切です。

ただ実際には、個々の子どもは、「聞こえにくい」という事情の他にも以下のような様々な事情のある子どももいます。自分から仲間を作ることが難しい理由は、聞こえにくさだけではないのです。

- ▶ 新しい場面で固まってしまう、慣れるのに時間がかかる。
- ▶ 知らない人や知らない機械が気になり、気持ちが落ち着かない。
- ▶ 人と関わるのが不安。どうして良いか分からず困ってしまう。
- ▶ 自分がしたいことや嫌なことを、人にアピールするのが難しい。
- ▶ 自分がしたいことや嫌なことを、繰り返しアピールして止まらなくなる。
- ▶ 困ったときに、人に助けを求めることが難しい。
- ▶ 人の話を、落ち着いて聞くことが難しい。
- ▶ 興味関心の範囲が狭く、会話の話題が限られてしまう。

これらは、子どもの心の中で起こっていることなので、「子どもの問題」ととらえることもできます。また見方を変えると、子どもと周りの人との関わりの中で起こっていることなので「関係の問題」ととらえることもできます。

「関係の問題」であれば、周りの人が子どもの気持ちをうまく受け止め、対応を工夫することによって、状況を改善できる場合もあります。

- ▶ 保護者から、普段どのようなとき不安になり、どのように落ち着きを取り戻すか情報を得ておく。
 - ▶ 保護者から、興味関心、好き嫌い、得意不得意、夢中になれることなどの情報を得ておく。
- 子どもが早く居心地が良いと思えるように、保護者から事前に情報を得て設定を工夫します。

- ▶ 個別支援の中で、子どもの不安な気持ちを読み取って、ことばで伝え返してみる。
- ▶ 個別支援の中で、子どものやってみたい気持ちを読み取って、ことばで伝え返してみる。

これらの対応は、「会話支援」の考え方と基本的に同じです。子どもがうまく言えない思いを支援者が読み取って言語化し、共有していくところが要点となります。子どもは「先生、分かってくれるんだ」と思えることで、一歩前に踏み出しやすくなります。

バディ・システムは、通常の学級のような集団で仲間を作ることが難しい子どもが、仲間作りのプロセスを体験できるように、子ども二人だけの場面を用意するものです。それでも難しそうな子どもには、サブプランとして段階を踏んで子どもだけの場面に移っていく方法もあります。

- ▶ 個別支援の中で、支援者がバディ役になり、バディ・システムをプレ体験させてみる。
- ▶ バディ・システムに入ってから、初めは支援者が加わり、3人で活動をしてみる。
- ▶ 様子を見て、支援者が引いて見守り役になり、子ども二人で活動させてみる。



3 支援者の心構え

(1) 子どもの自発的な活動を見守る

バディ・システムは子どもたちの自発的な活動の場です。子どもが自分で気づき、自分で考えて行動し、バディと仲間作り体験をします。自分のしたいことを主張するのも、バディの気持ちに気づき受け入れるのも、お互いのしたいことを調整するのも自分たちでします。それは子ども本来の姿です。それを最小人数の2名で、支援者に見守られながら活動するのがバディ・システムです。ここで自分の力で仲間を作った体験が、より大きな集団で仲間を作るときに役立ちます。

支援者の心構えとしては、見守ることに徹して、必要が生じたときだけ支援をします。例えば、

- ▶ もし、子どもがバディの話をうまく理解できなかったり、会話が食い違っているのに気づいていなかったりしたら、ホワイトボードなどを使い、子どもたちの話していることの要点やキーワードを書いていきます。要約筆記者のように要点を書くだけで、会話には加わらないようにします。
- ▶ もし、子どもたちが一緒に遊びたいのにきっかけを見つけられず困っていたら、支援者が遊びを提案したり、一緒に入ってきっかけを作ったりします。
- ▶ もし、子どもが困って助けを求めてくれば、それに対応します。

子どもが支援を必要としているサインを見逃さないように見守り、支援の必要がなければ、見守りに徹します。



(2) 相手の気持ちに気づけるように支援する

子どもが仲間作り体験をうまくできるためには、子どもが相手の子どもの気持ちを読む力（気づく力）がカギとなります。支援者としては、子どもが相手の気持ちに気づけているかどうかを読み取り、対応を考えていくことが支援の課題の一つになります。

「人の気持ちを読む」とは、その人の表情や行動、ことばなどから、その人の意図や感情を理解することで、簡単に分かる場面もあれば、かなり難しい場面もあります。

気持ちを読み取る力は、聴覚や視覚、認知や理解力などが総合された力で、人と関わった実体験によって育つ力です。基本的には、「人から気持ちを察してもらった体験」をベースにして育ちます。この力を獲得することは難しく、障がいのない子どもでも難しく、大人にとっても難しい力です。それでも、仲間作り体験をするためには、カギとなる重要な力です。

難聴の子どもの場合、実態は様々です。気持ちをうまく読み取る子どももいますし、苦手になっている子どももいます。

バディ・システムでは、子どもが自分で気づいて、考えて行動することを原則とします。多くの場合、子どもが気づくまで見守ります。ただし、気持ちを読み取るといった難しい課題については、支援者の介入によって、「相手の気持ちを知る体験」をすることも有効な場合があります。

「〇〇くんは、〇〇〇をしたかったのかもしれないよ」といった気持ちの通訳をしてみる。また、トラブルになったときに、双方の気持ちをホワイトボードに書いてやり、子ども同士が相手の気持ちを知ることが有効な場合もあります。

子どもが相手の気持ちを読み取れているかを把握するためにも、支援者は子どもを見守ります。

(3) 自分に向き合おうとする子どもを支援する

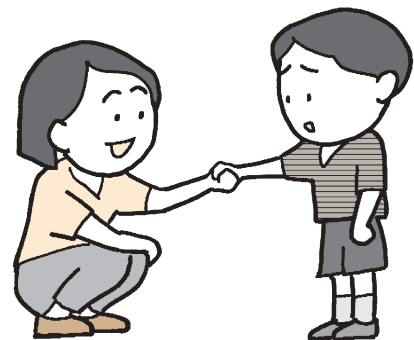
子どもの回復力（レジリエンス）をどう支援するかが、支援の課題の一つとなります。一般に子どもたちは遊びの中で、つまずきやしくじりなど、小さな失敗をたくさんします。それでも子どもたちは、強い回復力で再挑戦を繰り返し、たくましく成長していきます。

ただ、時には回復できず再挑戦ができない場合もあります。失敗をする自分を受け入れられず、固まってしまうこともあります。そうなると活動が前に進みません。

その時に子どもの中では、「失敗したくないからもうやりたくない」気持ちと「失敗してもいいからまたやりたい」気持ちが葛藤していると思われます。この葛藤している場面は、子どもが自分自身に向き合っていく重要な場面です。子どもが自分を見つめ、自分を受け入れられるか、あるいは自分と折り合いをつけられるかが重要です。

自分に向き合おうとする子どもを支援する方法として、支援者が鏡のようになって、子どもの姿を肯定的に映し返していく方法があります。例えば、子どもの挑戦がうまくいかなかったときに、「見ていたよ、すごく頑張っていたね」と笑顔で話し掛けてみます。子どもは、鏡（支援者）に映った自分の姿（頑張っている自分。喜ばれている自分）を見て、肯定的に自分をとらえることができれば、回復しやすくなるかもしれません。そのためにも、支援者は子どもを注意深く観察し、よく理解していることが大切になります。

子どもの心の動きを理解するためにも、支援者は子どもを見守ります。



(4) 安全確保の意識をもつ

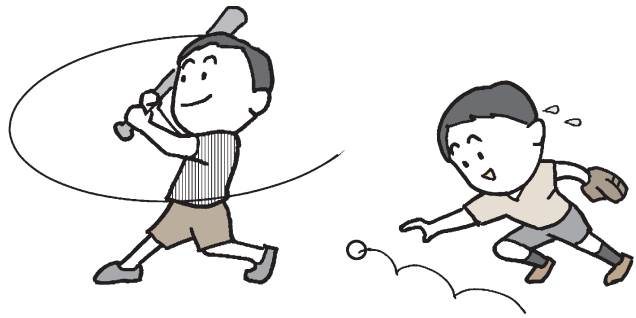
バディ・システムは子どもたちの自発的な活動の場であり、子どもの希望で様々な活動があり得ます。そのなかには危険を伴うものもあります。カッターナイフや彫刻刀などの刃物を使う活動。お菓子作りや調理など火気を使う活動。バットや跳び箱を使った活動などがあり得ます。

支援者の心構えとして、危険を予見し、危険を回避する安全確保の意識が求められます。この子たちがこの状況でこの活動をしたら、どのような危険があり得るかを常に考え、あらかじめ必要な対策や指導をします。

もし子どもが、物を壊す、ケガをする、ケガをさせるなど、子ども自身で対処できないような失敗

をすると子どもの心が萎縮して、せっかくの自発的な活動の場で、子どもが生き生きとした活動をしにくくなります。子どもの心を守るためにも、安全を確保することが大切です。

子どもの心と身体を守るために、支援者は子どもを見守ります。



(5) バディ・システムと個別支援の組み合わせを工夫する

バディ・システムは子どもが自力で活動する部分が多いのに対して、個別支援は子どもと支援者が一緒に活動する部分が多く、子どもにとって安心感があり、安全基地になっているといえます。

個別支援には支援者が様々な役割を設定することが可能です。バディ・システム導入前であれば、個別の指導課題に対する指導の他に、支援者がバディ役になってバディ・システムのプレ体験をさせるなど、導入の準備となる役割を設定できます。

導入後は、バディ・システムでの体験を振り返り、感想や希望を話し合い、困ったことを相談するなど、バディ・システムを支える役割を設定することもできます。

この他、導入前後の様々な活動を通して「会話支援」を行ったり、子どもの心の支えになったり、支援者が子どもを理解する機会となったりと、個別支援が色々と役に立ちます。反対に、バディ・システムによって新たな課題が見えてくるなど、バディ・システムが個別支援に役立つ場合もあります。

バディ・システムと個別支援との割合については、子どもの状態によって、バディ・システムの割合を増やしたり減らしたり、あるいは中断したりと、子どもの状態を見て柔軟に加減します。

(6) 先輩・仲間の支援者との連携

多くの支援方法と同じで、バディ・システムも支援者が一人で取り組むには難しい支援方法です。先輩や仲間の支援者とチームを作って取り組むことが大切です。記録を取って共有したり、相談したり、複数のスタッフで見直していくことが望まれます。お互いに話しやすい関係作りも重要です。

(7) 通常の学級の担任との連携

子どもが在籍する学級の担任と、情報を共有し、連携して支援を行うことも重要です。学級での子どもの様子について情報をいただくとともに、バディ・システムを行うねらいや支援の経過について情報を提供します。それぞれが、子どもの変化を共有しながら、支援や指導に生かしていきます。

(8) 保護者との連携

支援者と子どもとの信頼関係が重要であるのと同様に、支援者と保護者との信頼関係も重要です。丁寧な説明と話し合いに基づいて、保護者の納得が得られていることが大切です。また、保護者の子育て上の悩みを受け止め、子育て支援を行っていくことが必要な場合もあります。さらに、バディ・システムでは、保護者同士の絆が深まり、良い影響をもたらす場合もあります。

4 活動場所の設定

(1) その子たちにとって居心地が良い部屋に

子どもたちの自発的な活動には様々なものがあります。床の上で遊具で遊ぶ。卓上で作品をつくる。ボールで動き回って遊ぶ。楽器を弾く。ホワイトボードに絵を描く。ごっこ遊びをするなどなど。

初めは色々パターンを試してみるのも良いでしょう。時間を区切って、場面を変える方法もあります。子どもたちと相談して、二人が一緒に楽しめるパターンを見付けていくのも良いでしょう。

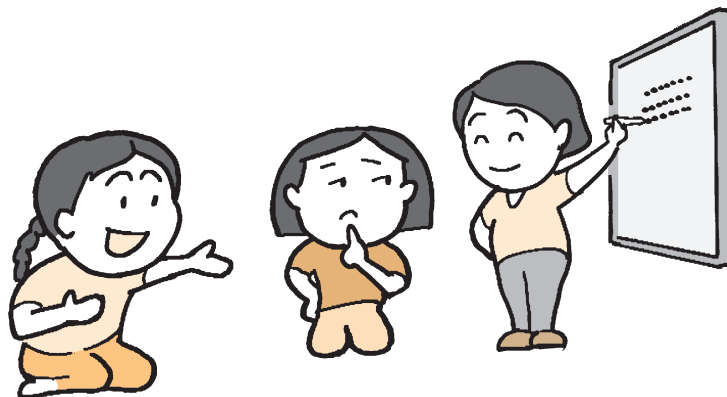
また、人目を気にしなくてすむようになる配慮も必要です。カーテンやパーテーションなどを使って、外部から丸見えにならないようにします。

(2) 難聴があることに配慮した部屋に

まず、外部からの騒音が少ない静かな部屋であることが重要です。部屋を選べるのであればできるだけ静かな部屋や時間帯を選びましょう。

会話を文字化できる道具、ホワイトボードや紙、筆記用具などが用意されていることも大切です。

プレイルームや体育館、騒音のある場所などで活動する場合は、支援者が補聴援助システムのワイヤレスマイクを付けていた方が良い場合があるかもしれません。



(3) 活動の範囲を明確にする

活動できる範囲、時間と空間を子どもがあらかじめ理解していることが大切です。子どもたちはそれらを理解した上で、自分たちがしたい活動を自分たちで組み立てていくことになります。

支援者は、「何時何分から何時何分まで、どこで活動できるか」を、あらかじめ子どもたちが理解できるようにします。例えばホワイトボードに書いておく、残り時間を示すタイマーを利用するなどです。

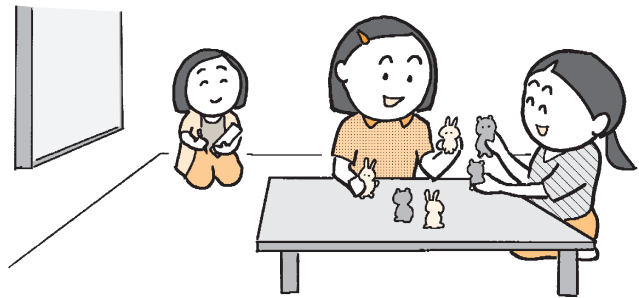
5 4つのアプローチ方法

(1) 見守りアプローチ

見守りアプローチは、支援者の最もメインとなる仕事になります。常に、子どもたちと状況を様々な視点から見守り（観察し）ます。観察したことを後述する3つのアプローチに活かしていきます。アプローチのステップを理解し、複数の支援方法を考えてメモするなどの準備をし、支援の必要が生じたら選択して支援します。支援の必要がなければ、見守りアプローチに徹します。

観察する視点は、以下のようなものがあります。

- ▶ 子どもの行動や表情、会話を観察する。
- ▶ 子どもと子どもとの関係や会話を観察する。
- ▶ 子どもと支援者自身との関係を第三者的視点で観察する。
- ▶ 子どもたちを取り巻く環境や状況を観察する。
- ▶ トラブル発生や支援の必要の発生を見逃さないように観察する。



(2) 環境アプローチ

環境アプローチは、子どもたちの自発的な活動を支えるため、以下のように環境を整備します。

- ▶ 居心地がよい …… 適度な広さ。明るさ。シンプルに整理されている。人目を気にしなくてすむ。
- ▶ 会話がしやすい …… 静か。明るい。ホワイトボードや紙、筆記用具など。
- ▶ 一緒に遊びやすい …… 子どもたちが好きな遊具、用具。楽器。スポーツ用具、配置など。
- ▶ 相談しやすい …… 机や椅子の配置。ホワイトボードや紙、筆記用具など。
- ▶ 安全確保 …… 活動内容に応じて危険を予見し、危険を回避する対策や指導をする。

これらは主に事前の準備の時にありますが、活動中でも活動の展開次第で、必要な遊具や用具を出すなどの対応が考えられます。



(3) 間接アプローチ

間接アプローチは、直接子どもの活動に参加したり、指示したりしない範囲で、子どもたちの自発的な活動を支えるために行う支援です。例えば、

- ▶ 要約筆記……子どもたちの会話がうまく伝わっていない、あるいは誤解しているのに気づかないなどの場面が見られたときに、ホワイトボードなどに会話の要点を書くなど。会話には参加しない。
- ▶ 遊びが行き詰まったときに、場面を転換する、新しい遊具を出すなど。
- ▶ うなずき（肯定表現）も大事な支援です。子どもたちが喜んでいたら一緒に喜ぶ。
- ▶ 指さして、もう一人の子どもに注目させる。



(4) 直接アプローチ

直接アプローチは、子どもたちだけでは対処できないような場面になったときに、支援者が直接関わって行う支援です。例えば、遊びが始まらない、気持ちがぶつかってしまう、話し合いがまとまらない、トラブルが発生、危険が予見されるなどがあります。

- ▶ 二人で遊びが始められないときに、きっかけを提供する。
- ▶ 子どもが相手の気持ちに気づかないときに、相手の気持ちを知らせる。
- ▶ 二人の気持ちがぶつかってしまったときに、気持ちの通訳を試みる。
- ▶ 二人の話し合いがまとまらないとき、問題を整理してみる。代替案を提案してみる。
- ▶ トラブルが発生したら、素早く対処する。危険を予見したら、回避する対応をとる。
- ▶ 子どもが葛藤していたら、それを肯定的にとらえて伝えていく。

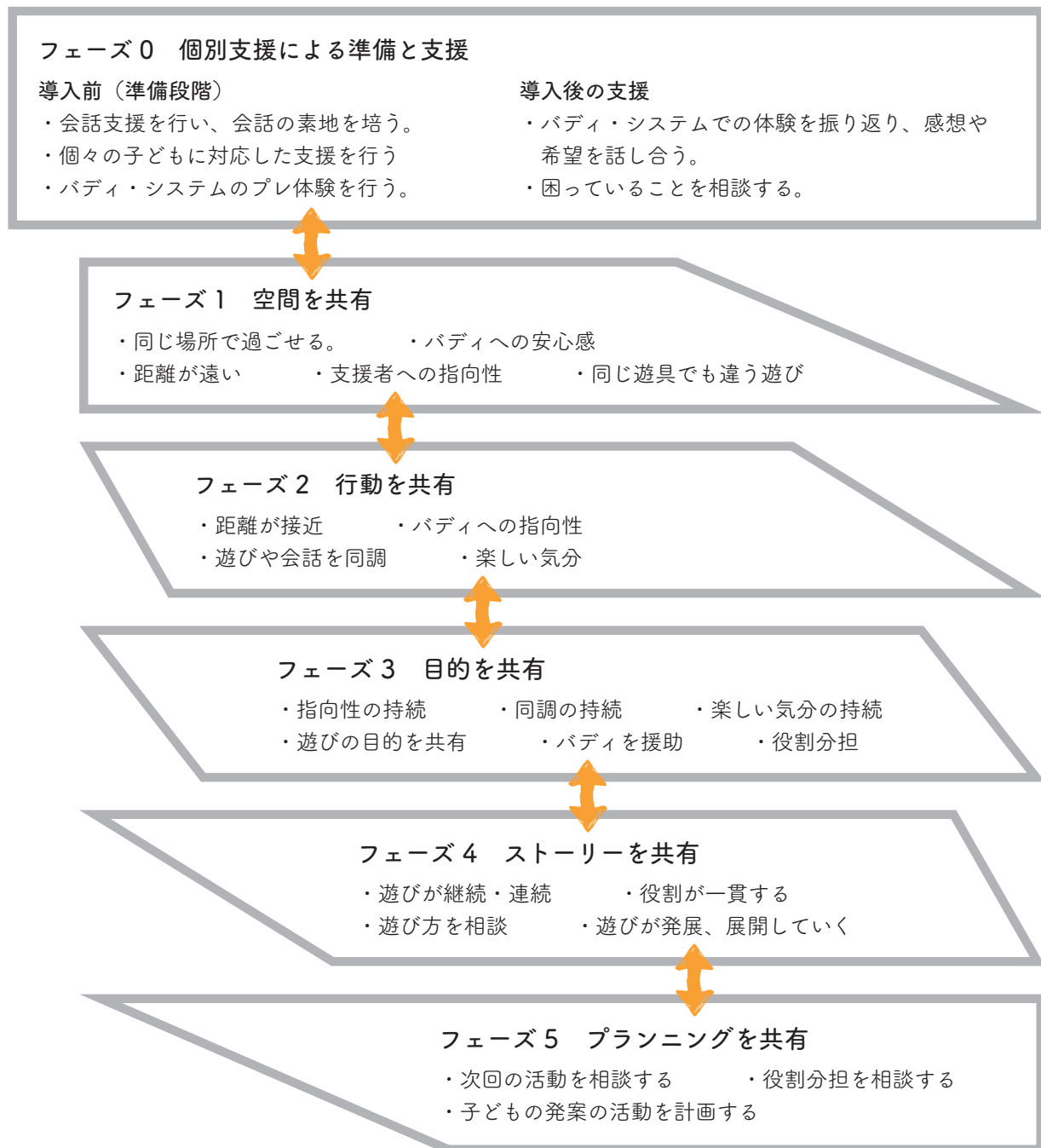


6 フェーズごとのアプローチ方法

(1) フェーズ0からフェーズ5までの流れ

各フェーズを行ったり来たりしながら、徐々にフェーズ5の方向に移行していくイメージです。

時間 →



その他の発展的な展開例

- ・3～5人で活動する
- ・テーマ（お題）について話し合う

(2) フェーズ0 個別支援による準備と支援

● バディ・システム導入前（準備段階）

様々な学校や病院、支援施設において支援を開始するにあたって、まず個別支援の場において、以下のようなことが行われ、個別の支援計画が検討されると考えられます。

- ▶ 保護者の方の心配や希望、発育や障害に関する情報を伺う。
- ▶ 子どもと関わりながら観察や検査をし、実態をよく理解する。
- ▶ 子どもと担当者との信頼関係を培っていく。

その過程で、バディ・システムについて保護者に説明し納得が得られれば、準備に入ります。

- ▶ 原則的にどの子どもにも「会話支援」を行い、仲間作りの基礎となる会話の素地を培います。
- ▶ 必要があれば、個々の子どもに対応した支援を行います。
- ▶ 必要があれば、支援者がバディ役になってバディ・システムのプレ体験を行います。

個別の支援を進めて、以下のような様子が見られれば、バディ・システムの導入を検討します。

- ▶ 物だけでなく、人にも興味をもてる。
- ▶ 安心感や人への愛着・信頼がある。
- ▶ 支援者に対して要求や拒否ができる。
- ▶ 支援者と落ち着いて会話ができる。

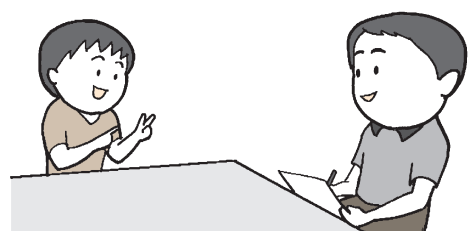
ペアになるバディを選び、日程を調整し、バディ・システムを開始します。

● バディ・システム導入後

導入後も、個別の指導課題に対する個別の支援が継続される場合があるかと思います。また、そのような必要のない子どもの場合にも、個別に子どもと担当者の間で話し合う機会を定期的に設け、バディ・システムでの体験を振り返り、感想や希望を話し合ったり、困ったことを相談したりします。

順調に見えるお子さんの場合にも、突然困難な状況になることがあります。困っていることを相談したり、そのような兆候を見つけたりするためにも、子どもと担当者とは個別に会話できる機会は保ち続けることが重要です。

個別支援の場で支援者と相談。





(3) フェーズ 1 空間を共有

バディの特徴

- ・同じ場所で過ごせる。
- ・バディへの安心感。
- ・距離はまだ遠い。
- ・支援者への指向性が強い。
- ・同じ遊具でも違う遊び方をする。

	観察視点	支援・配慮
見守り アプローチ	・どこで何をしている？ 二人の距離は？ ・何を見ている？ 遊具？ バディ？ 支援者？ ・安心して落ち着いて過ごせているか？	・優しい笑顔で見守る。表情も大事な支援。
環境 アプローチ	・安心して過ごせる環境になっているか？ ・遊具に満足しているか？ 足りているか？ ・どの遊具に興味をもったか？	・子どもにとって居心地がよい部屋に。
間接 アプローチ	・バディへの関心、働きかけ、会話は？ ・二人だけで過ごせるか？	・うなずき（肯定表現）も大事な支援。 ・必要があれば、子どもの会話を要約筆記。
直接 アプローチ	・支援者が一人の子どもと話しているときの、もう一人の子どもの様子は？ ・支援者に助けを求める様子は？	・子どもからの話し掛けに、もう一人とのバランスを考えながら応える。 ・助けを求めてくれば、それに対応する。



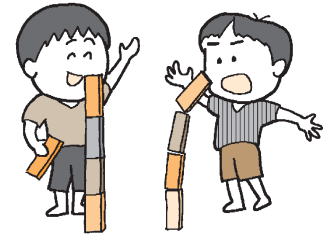
(4) フェーズ 2 行動を共有

バディの特徴

- ・距離が接近。
- ・バディへの指向性。
- ・遊びや会話を同調。
- ・楽しい気分。

	観察視点	支援・配慮
見守り アプローチ	・どのくらい一緒に過ごせる？ ・同じことをしている？ きっかけは？ ・一緒に楽しんでいる様子は？	
環境 アプローチ	・一緒に遊べる遊具は何？ ・会話を邪魔する要素は？ 騒音？ 明るさ？	・一緒に遊べる遊具に絞っていく。 ・二人で遊ぶのに居心地がよい部屋に。 ・会話しやすい静かさや明るさ。
間接 アプローチ	・二人の距離は？ 二人の視線は？ ・二人の表情は？ 気分は？ ・バディへの関心、働きかけ、会話は？	・指さして、もう一人の子どもに注目させる。 ・子どもたちが喜んでいたら、一緒に喜ぶ。 ・必要があれば、子どもの会話を要約筆記。
直接 アプローチ	・一緒に遊ぶために、足りないことは？ ・もっと仲よくなるために必要なことは？	・必要があれば、遊びのきっかけを作る。 ・「いーれて、かして、こーたい」など、一緒に遊ぶためのことばのモデルを示す。

どっちが高く積めるかな？



(5) フェーズ3 目的を共有

バディの特徴

- ・指向性の持続。
- ・同調の持続。
- ・楽しい気分の持続。
- ・遊びの目的を共有。
- ・バディを援助。
- ・役割分担。

	観察視点	支援・配慮
見守り アプローチ	・目が合う場面は？ 気持ちが合う場面は？ ・関わりが深まる遊び方は？ ・離れていく場面は？ きっかけは？	
環境 アプローチ	・関わりが深まる遊具は？ ・会話を邪魔する要素は？ 騒音？ 明るさ？	・やり取りしやすい配置や道具を準備。 ・会話しやすい静かさや明るさを。
間接 アプローチ	・二人の会話の様子は？ ・二人にとって面白いことは？	・必要があれば、子どもの会話を要約筆記。 ・遊びや会話が続くように橋渡しする。
直接 アプローチ	・二人が合わないところはどこ？ ・二人は何を期待している？	・必要があれば、気持ちの通訳をする。 ・子どもの葛藤を肯定的にとらえ伝えていく。 ・次回への希望を聞いてみる。



(6) フェーズ4 ストーリーを共有

バディの特徴

- ・遊びが継続・連続
- ・役割が一貫する
- ・遊び方を相談
- ・遊びが発展、展開していく

	観察視点	支援・配慮
見守り アプローチ	・自分の気持ちを表現できるか？ ・バディの気持ちに気づけるか？ ・助け合いは？ 相談は？ 折り合いは？	
環境 アプローチ	・二人はどのような場面が居心地よい？ ・会話を邪魔する要素は？ 騒音？ 明るさ？	・二人の希望するセッティングを試してみる。 ・会話しやすい静かさや明るさを。
間接 アプローチ	・二人の会話のパターンは？ ・二人の遊びのパターンは？ 飽きてない？	・必要があれば、子どもの会話を要約筆記。 ・よく相談してやることを促す？
直接 アプローチ	・意見は一致する？ 不一致？ 決裂？ ・主導権は？ 役割の交代は？ ・バディとの仲間意識は芽生えている？	・必要があれば、気持ちの通訳をする。 ・役割の交代や新しい遊びを提案してみる。 ・二人の葛藤を肯定的にとらえ伝えていく。

来週、何をして遊ぶかをバディと相談。



(7) フェーズ 5 プランニングを共有

バディの特徴

- ・ 次回の活動内容を相談する
- ・ 子どもの発案での活動を計画する
- ・ 役割分担を相談する

	観察視点	支援・配慮
見守り アプローチ	・ 自分の希望を主張できるか？ ・ バディの希望を受け入れられるか？ ・ 折り合いをつけられるか？	
環境 アプローチ	・ 二人はどのような場面が話しやすいか？ ・ 会話を邪魔する要素は？ 騒音？ 明るさ？	・ 相談しやすい配置や道具。 ・ 会話しやすい静かさや明るさ。
間接 アプローチ	・ 二人の会話は理解し合っているか？ ・ 実現が難しい提案をしていないか？	・ 必要があれば、子どもの会話を要約筆記。 ・ 実現可能な代替案を提案してみる。
直接 アプローチ	・ 相談がまとまらず、混乱していないか？ ・ 一方的な相談になっていないか。	・ 必要があれば、問題の整理を試みる。 ・ 二人の主張のバランスを調整する。

(8) その他の発展的な展開例

▶ 3～5人で活動する

他のバディと合流したり、参加人数を増やしたりして活動してみる。

▶ テーマ（お題）について話し合う

支援者が提示するお題について、それぞれの体験や考えについて話し合う。

7 再び会話支援について

難聴のある子どもたちは、大変な努力をして人の話を聴き取ろうとしたり、読み取ろうとしたりしています。それでも常に確実な会話をするのは難しいのが現実です。

より確実な会話をするためには、聞き取れなかったら聞き返して確認し、聞き取れても復唱して確認をします。また、筆談や手話を使って確認したりするなど、より確実な手段で確認しながら会話する習慣を身につける必要があります。

もし難聴のある人が、確実に会話する手段を持てず、人と会話することに希望が持てなくなり、会話することを諦めてしまえば、一人孤立してしまいます。

聞こえる人のように効率よく会話できなくても、手間や時間がかかっても、自分なりの手段で確認しながら会話する習慣を身につければ、人々の中で孤立せず、人とつながりながら生きていくことに役立ちます。そのために、周りの人々が協力して、確かな会話体験を積み重ねていく必要があります。

バディ・システムにおいては、導入前の準備段階でも、導入後でも、確かな会話体験を目指す会話支援を行うことが重要になります。



通常の学級や家庭とのコラボレーション

池田 寛

通常の学級が単独でバディ・システムを導入することは難しいかもしれません。しかし、バディ・システムを行っている病院や通級指導教室、福祉施設の支援者と、通常の学級の担任とが連携して、バディ・システムの成果を通常の学級につなげる意図で、通常の学級においてバディ・システムの考え方を一部取り入れた取り組みをすることは有意義なことだと思います。

バディ・システムでは、二人組で自発的な活動をして仲間作り体験をします。その体験を生かして、通常の学級では、学級の活動の中の一つの役割を、二人組で活動することに挑戦します。

まず、バディ・システムを行う支援者と担任とが、バディ・システムの意図や、子どもに関する情報を共有していることが必要です。例えば、

- その子どもへの会話支援はどのような方法が有効か。
- バディ・システムのフェーズ0から5の内容と、今その子がどのフェーズにいるか。
- バディ・システム導入後、その子にどのような変容が見られているか、など。

通常の学級における活動は、騒音のある場所で、数人の子どもの相談する場合が多く、難聴のある子どもにとって話しにくく、活動に参加しにくくなります。そこで活動を二人組に限定してやると、難聴のある子どもは、一人の子どもに集中することができ、会話や相談がしやすくなります。フェーズの段階に応じて活動内容を選択し、二人で相談しながら活動してもらいます。

- ①もしその子が、フェーズ3ぐらいであれば、バディとの会話に専念できるような簡単な活動を二人組の役割にします。ねらいとして、役割分担を相談する、相手を援助するなど。
例として、毎日行う植物の水やりや動物のえさやりなど。
- ②もしその子が、フェーズ4ぐらいであれば、バディとの会話＋級友との会話がともなうような複雑な活動を二人組の役割にします。ねらいとして、作業の手順を相談する、協力して作業するなど。
例として、毎日行う健康調べやプリント配りなど。
- ③もしその子が、フェーズ5ぐらいであれば、バディとの企画相談＋級友との会話がともなうような活動を二人組の役割にします。ねらいとして、二人で企画を相談する、協力して進行をするなど。
例として、学級レクのプログラムの一つを企画し進行するなど。

家庭においても同じ考え方が使えます。

- ①保護者と二人で簡単な作業をする。例 母親と二人で居間の掃除をしてみるなど。
- ②兄弟や友達と二人で作業をする。例 兄弟二人で買い物に行かせてみるなど。
- ③保護者と二人で企画を相談する。例 父親と二人でキャンプの計画を相談してみるなど。

保護者と担任と支援者の三者で、バディ・システムによる成果を共有しながら、共通の思いで子どもの成長を見守ってけるとよいのではないのでしょうか。

V

バディ・システムFAQ — こんなときどうしたらいい? —

Q¹

難聴のある子ども同士の組み合わせがよいのでしょうか?

難聴同士は様々なメリットがありお勧めです。でも、他障がいの組み合わせも大丈夫です。

A¹

通常の学級に在籍している場合は、自分一人が難聴であり、周囲の子どもたちとの間で様々なストレスを感じながら暮らしています。バディが同じ難聴同士であればストレスが薄れ、一緒に過ごしやすくなります。耳に補聴器や人工内耳を付けている同士ということで、仲間意識も持ちやすくなります。会話するときも、お互いに聞こえにくさを分かっているので、安心して聞き返せる、などの良さがあります。難聴のある同士が会うことで、「自分だけではない」「みんな頑張っている」とお互いに影響し合い、前向きな気持ちを持ちやすくなります。

では難聴同士でなければだめかという、そのようなことはありません。年齢が近い同性の難聴の子どもがいないなどの場合は、言語障害や発達障害などの子どもと組むことも考えられます。障害区分が違うことにこだわらなくてもよく、子どもたちは、同じ病院（教室）に通う仲間といった仲間意識を持つことでしょう。通常の学級の中では友達ができにくいけれど、友達と遊びたいと思っているのであれば、バディ・システムの対象と考えられます。

Q²

バディとの相性が悪い時は、どのようにすればよいのでしょうか?

うまくいかないとき、子ども同士の相性だけを考えるのではなく、色々な視点から状況を把握し対応を検討しましょう。

A²

この二人はうまくいくだろうと組み合わせてみたが、活動がバラバラでなかなかじまない。「相性が悪かったのかな?」などと思ってしまうことがあるかもしれません。でもうまくいかない理由を子どもの相性だけに求めてよいのでしょうか。もしかしたらバディ・システム導入が早かったのかもしれませんが。または、もう少し時間が必要なのかもしれません。場面の設定がよくなかったかもしれません。一緒に遊ぶきっかけを見つけられないだけかもしれません。このように色々な視点から検討して

みましょう。

支援者の対応（アプローチ）としては、平行遊びの段階（フェイズ1）で、子どもが落ち着かない不安そうな様子であれば、一旦中断して個別支援（フェイズ0）に戻し、数か月後に再開する方法もあります。逆に平行遊びで、別々に楽しそうに活動していれば、もう少し待って観察を続けます（見守りアプローチの継続）。子どもの心の動きを観察し（A6を参照）、観察結果を基に、遊具を替えたり部屋を替えたりしてみる（環境アプローチ）。支援者が子どものことばや遊びをまねしてみる（間接アプローチ）。支援者が入って遊びを提案してみる（直接アプローチ）、などの対応が考えられます。

バディ・システムは、相性の良い子ども同士を組合せて仲間作りをする、というのではなく、支援者による丁寧な準備と見守りによって、子ども同士に自発的な仲間作りのプロセスを経験させるものです。

Q³

バディ・システムに難聴の程度は関係ありますか？

Q⁴

補聴器の子どもと人工内耳の子どもで、対応に違いがありますか？

難聴の程度や補聴手段に関わらず、その子にとって会話しやすい環境を整えることが重要です。その子が会話しやすい聴覚補償や情報保障、会話手段を見つけていきましょう。

A³

A⁴

難聴のある子どものためのバディ・システムでは、その子にとって会話しやすい環境を整えていくことが重要で、その準備ために様々な観点から子どもを理解していきましょう。

まず客観的に聴覚障害の状態を把握します。裸耳の聴力（オーディオグラム）も重要ですが、日常の聞こえの状態、つまり補聴器や人工内耳を装用した状態での聴力「装用時閾値」がより重要になります。装用時閾値が40dBよりも大きい場合には、ことばの聴き取り検査の結果と合わせ考えて、補聴器や人工内耳の再調整や修理を検討する必要があります。

その上で、聴覚だけではなく視覚やそれらを統合した脳の働きも含めて、ことばを聞き取る力、口の動きを読み取る力、文字を読み取る力、手話を読み取る力はどのように育っているか。会話場面で聴覚情報と視覚情報のどちらを取り込むのが得意かなどを把握しておきます。

子どもによって、音声情報を求める、読話を求める、文字情報を求める、手話情報を求めるなど、その子が求める会話手段が違います。その子に合った会話手段を選択したり、組み合わせたり、あるいは会話しやすくなるように環境を整備していきます。このような考え方は、難聴児支援だけでなく

く、障害児支援全般においても重要視されてきています。

○音声情報を求める子どもには、静かな部屋を用意しましょう。もし、体育館や屋外など騒音のある場所で活動する場合は、ワイヤレス補聴援助システムを活用すると良いでしょう。また、子どもに話し掛けるときの距離や方向も配慮します。子どもによって左右どちらの耳が聞き取りやすいか違います。聞き取りやすい耳の近くから、ちょうどよい声の大きさを話し掛けましょう。離れたところから大きな声で話すと、母音は聞き取れても、子音は聞き取れないことがあります。

○読話を求める子どもには、常に子どもの方に顔を向けて、目と目が合ったタイミングで話し掛けましょう。マスクやマイクで口元を隠さないようにしましょう。子どもから見て話し手の顔が明るく見やすい、逆光になっていない、といった配慮も大事です。

○文字情報を求める子どもには、紙やホワイトボード、筆記用具などを活用しましょう。また、電子パッドやタブレットなども有効です。今後は、音声文字変換アプリなどが活用できるかもしれません。

○手話情報を求める子どもには、手話を活用しましょう。支援者の手話が下手でも、手話を使うことで、子どもと支援者の心の距離が近くなります。

実際には、これらを組み合わせて対応することになります。

Q⁵

バディ・システムを組めば、自然と仲間意識が育つのですか？

バディ・システムにも準備が大切です。準備のポイントは子どもと支援者とのつながり（関係）です。つながりを育てていくために会話支援をしていきましょう。

A⁵

バディ・システムは、子ども同士が自発的につながることを促す試みです。それがうまくいくためには、子ども同士の前に、子どもと支援者の気持ちがつながっていて、安定した関係にあることが大切です。

子どもが「ここなら大丈夫」「この先生なら大丈夫」と思えると、新しい友達とつながることにチャレンジしやすくなります。このような関係をもう少し具体的に説明すると次のようになります。

- ▶ 子どもが周りの大人や子どもに興味関心があり、支援者となら会話ができつつある。
- ▶ 支援者は、子どもの行動の意味や心の動きをおおよそ理解しつつある。

- ▶ 子どもは支援者に安心感を持っていて、要求したり頼ったりする関係ができつつある。

子どもと支援者との間でこのような準備（関係）ができると、子ども同士の間でも仲間意識が育ちやすくなります。その準備をするためには、「会話支援」をすることが効果的です。

会話支援をする支援者は、子どもにとって分かりやすく伝えることと、子どもの思いを受け止めて伝え返すことに努めます。そのような支援を通して、子どもに主体性や協調性が育っていき、バディ・システムへの準備ができていきます。

Q⁶

見守るときに、子どものどこを見ていけばよいのですか？

A⁶

子どもを見るポイントは、子どもの視線の動きや音への反応、姿勢や声の状態等です。把握したいのは心の動きです。

バディ・システムは子どもの自発的な活動ですから、子どもの心次第というところがあります。支援者は子どもを見守り、その時その時の子どもの心の動きをとらえながら、次の対応を検討します。

子どもを見るポイントとしては、まず、子どもの心のアンテナが何に向いているかを観察します。そのために、視線の動きに注目します。また、音への反応にも注目します。視線等から、子どもが何を警戒しているか、何を求めているか、何に興味関心があるのかなどが推測できます。また、まだことばには出せない子どもの思いを読み取れる場合もあります。

次に子どもの心の状態、例えば、不安なのか安心していているか、緊張しているかリラックスしているか、嫌なのかうれしいのか、などを観察します。そのために、表情に注目して観察します。また、ことばや発音にも注目して観察します。ただ、表情やことばは、子どもが意識的に装うことができます。うれしいのに無表情を装う。不安なのにニコニコするなどです。観察する視野を広げて、子どもの姿勢や身体の動き、声の調子や呼吸まで観察すると子どもの本当の心の状態をとらえやすくなります。

子どもは、安心し、リラックスし、うれしいときに、新しいことにチャレンジをしやすくなります。そうなるように、子どもの心の動きを踏まえて、環境アプローチや間接アプローチ、直接アプローチを計画しましょう。

Q⁷

家庭内で難聴のない兄弟姉妹ともバディ・システムはできますか？

バディ・システムの考え方は、難聴のある子どもと家族との関係作りにも役立ちます。

A⁷

家庭においても、バディ・システムの考え方の一部を取り入れた取り組みができます。バディ・システムを行っている病院や通級指導教室の支援者と連携して取り組みましょう。バディ・システムでは、二人組の活動を基本とします。これは難聴のある子どもにとって会話しやすい活動形態です。

実は、家族であっても数人が会話する場面で、難聴のある子どもが全て理解することは難しいのです。その困難さを理解しフォローすることは、家族の方でも難しいかもしれません。難聴のある子どもが家族の中で疎外感を感じることにはない、とは言いきれないのです。

そこで、難聴のある子どもと家族とが、遊びでも家事でも二人組で取り組むことを試みてはどうでしょう。お兄ちゃんと二人で買い物に行く。お母さんと二人で料理をしてみる。お父さんと二人で模型を作ってみるなどして、二人組でしっかり相談する機会をもち、家族同士の関係を深めてみてはどうでしょうか。家族の中で、人とつながる体験をしておくことは、学校や社会で人とつながるための礎になるでしょう。

Q⁸

家庭内での「会話支援」はどのようにするのがよいのでしょうか？

保護者の方がしている会話の仕方を尊重しながら、一歩丁寧な会話になることを目指しましょう。

A⁸

「会話支援」は、まだ聞き取る力も話す力も未熟な子どもに支援者が会話をして、子どもに会話する喜びを体験させるという支援で、実は結構高度な技なのです。保護者の方の会話する力は様々です。発音の不明瞭な子どもの思いをほぼ理解してしまう方もいらっしゃる一方、人と会話することが苦手という方もいらっしゃいます。一律にこうしたらよいというのは難しいと思います。

考え方としては、その保護者の方の会話の仕方を尊重し、保護者自身が気づいて工夫し改善して、お子さんにとってより分かりやすい、より話しやすい会話に近づいていく方向を目指しましょう。

高い目標を目指すより、現状より一歩丁寧な会話を目指す方が良いでしょう。日常の会話は、つつい省略したことばづかいや、雑なやり取りになりがちですが、そのような会話は難聴のある子どもにとっては理解しにくいのです。保護者の方のできる範囲で丁寧な会話を目指しましょう。

また、支援者から取り組み目標を提案する方法もあります。「目が合ってから話し掛けてみましょう」とか「早口にならないように気をつけましょう」「お子さんが話したことを繰り返して伝え返してきましょう」など、いくつか提案をして、保護者の方が自分でできそうと思う取り組みの一つを選んで取り組んでいただきます。取り組んでいただいて保護者の方が発見したことなどを話し合っていきます。保護者の方が見つけたこと、工夫したことを大事にしていきましょう。

Q⁹

通常の学級でバディを組むことは、周囲の子どもたちに、どのような影響がありますか？

Q¹⁰

通常の学級でバディを組むことは、本人に、どのような影響がありますか。

双方にとって、相手のことを考える意識が育ち、難聴という障がいの困難さと、その困難さとうつきあっていくかを、体験的に学習できることになります。

A⁹A¹⁰

通常の学級においても、バディ・システムの考え方の一部を取り入れた取り組みをすることができ、病院や通級指導教室の支援者と連携して取り組むとなお良いでしょう。

学級での活動の一つを、難聴のある子どもと聞こえる子どもの二人組で取り組んでもらいます。共通の役割を果たすために二人で相談しながら活動します。二人組で会話することは、難聴のある子どもにとって会話しやすい組み合わせですが、共通の役割を果たすため、曖昧な会話ですませることはできません。何らかの工夫をして二人が分かり合えるようにしなければ、相談したことになりません。

ここで二人は、難聴による困難さに直面し、その困難さとうつきあっていく工夫について体験的に学ぶことになります。自分のことだけでなく相手のことを考える意識が育つでしょう。相手の困難さを理解する、相手のために協力する、相手の協力を感謝するなど、人とつながって生きる心豊かな人に成長するために貴重な体験となるでしょう。

難聴のある子どもにとっては、自分の困難さを自覚することも、それを人に説明することも、どう協力してほしいかを説明することも、なかなか難しいのです。そもそも、自分の聞こえ方と周りの人の聞こえ方の違いを、聞こえにくい本人が理解することが難しいのです。

それでも成長に伴って、自分の難聴について周りの人に理解を求め、協力を得るための説明をしていく力を身につけていかなければなりません。二人組の活動の中で、分かり合うことの困難さと、分かり合うための工夫を体験することは、将来自分で説明できる人になるための貴重な経験となるでしょう。

VI

好事例紹介



バディ・システム 好事例紹介

～4人のインタビューを通して～



A 君 男性 16 才
片耳人工内耳装用
小・中・高校 通常学校



B 君 男性 16 才
片耳人工内耳装用
小・中・高校 通常学校



C さん 女性 16 才
両耳人工内耳
小・中・高校 通常学校



D さん 女性 19 才
片耳人工内耳装用
小・中聾学校 高校通常学校



Q あなたのことをよく理解して、話し合える友達はいますか？

小・中学校が同じ親友が 2 人います。普段の会話で相談したいことあれば聞いてもらうこともあります。



友達は結構います。部活（野球）の試合では、友達がジェスチャーで伝えてくれるから助かります。



保育園・小・中学校が一緒に仲がいい友達がいます。



高校生で同じ部活だった 6 人グループが今でも仲がいいです。





Q 難聴のことを学校や友達に伝えるので困ったことはあった？

小・中学校は人数が少なくてみんな知り合いだった。高校に入学して、自分のことを知らない人がいる環境だったから、どうやって難聴のことを伝えればいいか困りました。



小・中学校は難聴のことを気にしない子が多かった。高校に入って、人工内耳のことをクラスメイトに聞かれた。説明をして、自分も相手も不安がなくなったから良かったなと思っています。



高校1年の自己紹介で難聴のことを話しました。全校集会で「聞こえにくい子が入学しました」と伝えてもらったのも私としてはよかったと思います。



中学校までは聾学校だったから、困ったことはなかった。高校入学前の説明会で先生に難聴のことを伝えました。仲良くなった子には、難聴のことを話したので特に困りませんでした。



Q 友人関係でもめたりしたことはあった？

高校の部活では難聴のことを言っていなくて、初めの頃、「無視してる」と思って誤解があった。その後、徐々に仲いい子には伝えるようにした。



友達関係で今までもめたことはない。耳が聞こえないからと言って、自分から話しかけなかったり、交流しないのは印象が悪いから、昔からゲームの話とかをするようにしていた。



中1くらいでいじめてくる子がいたけど、相談してもだめだったから、無視してた。高校に入ってから、特にもめたりしていないです。



高校ではもめることは1回もなかった。



Q 友達作りのポイントは？

初めて会うとき人には、のちのち面倒くさくなるから、難聴だということを伝えるそれが第一かな、あとで困るから。聞こえない時も、その都度、「大きな声で言って」と頼むようにしてます。



小学校から積極的に声をかけていくと、その友達が長い付き合いになって、助けてくれたりすると思う。ほかの人に気を使わずに、聞こえなかったら正直に聞いた方がいいと思う。



趣味や共通点を探して楽しめる友達を探した。仲良くなるうちに難聴のこともわかってくれて、配慮して話してくれるようになった。



積極的に明るく話かけることを意識した。今もできるだけ受け身は避けるようにしている。

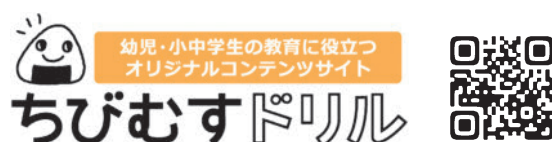




内田美花

私の19歳の娘と17歳の息子はともに生まれつきの難聴です。乳幼児の頃から補聴器や人工内耳を装用しており、普通幼稚園、普通学級に通学してきました。医療機関や学校等の先生方からこれまでにいただいた多大な支援には感謝してもしきれません。

子供達の幼児期は、二人とも言葉の習得に遅れがあったため、少しでも多くの言葉に触れさせたいと思い、様々な工夫をしました。言葉の教室の先生の指導を受けながら、家庭でもたくさん言葉に触れさせようと、日常を撮影した写真やイラストを多く使った教材を自力で作りました。小学校入学後は、特に算数が苦手だった娘のために、分かりやすい問題やポスターを自作して一緒に勉強しました。それらの取り組みをブログで紹介したのがきっかけで、後に無料教材プリントの公開サイト（ちびむすドリル <https://happyilac.net/>）の運営に発展しました。今では全国のたくさんの親御さんや先生方にご利用頂いており、私達の経験が様々な方々のお役に立っているようで嬉しく思います。



ただ、私自身の子育ては、正直に言えばずっと迷いながらで、「これで良かったのかな」と、今も自信はありません。

幼稚園、小学校、中学、高校と私がずっと感じてきた子供達の課題は、「同級生となかなか親密になれない」とことと、「自発性」でした。子供達の学校生活は、表面的には、学力面でも行事等の参加にも大きな問題がないように見えるのですが、心が通い合う親密な友達がなかなかできにくいと感じていました。もし、もう一度子育てをやり直せるとしたら、もっと早くから子供達に伝え体験させてあげたいことがあります。それは、言葉や会話とは意見を言ったり、先生や友達の説明を聞いたり、用事を足したり、勉強したりするためだけにあるのではないことです。そして、他者の言動の背景を想像して気持ちを理解したり、共感したり、自ら寄り添ったり、ときに積極的に協力したりすることの素敵さです。そうした「自発的に他者に寄り添う心」も早くから意識して育てていたなら、子供達はもっと豊かな学校生活を送れていたかもしれないと、今となっては感じます。

難聴児は、普通学級ではどうしても「支援してもら側」の立場になりやすく、先生や同級生も遠慮があるので本音でぶつかってもらいにくく、遠巻きにされやすいです。他方で、からかいやいじめを受けることもあります。そんな中、親しい人間関係を構築するにはどうしたらいいのか、アドバイスやさりげない手助けをしてくれる人が身近にいてくれたら、子供達は心強いのではと思います。



執筆者一覧

中川尚志	九州大学大学院医学研究院 耳鼻咽喉科学分野 教授
片岡祐子	岡山大学病院 耳鼻咽喉科 講師
野田哲平	九州大学大学院医学研究院 耳鼻咽喉科学分野 助教
平島ユイ子	福岡国際医療福祉大学 言語聴覚専攻科 教授
宮田 遼	札幌医科大学 耳鼻咽喉科・頭頸部外科学講座 助教
藤野 博	東京学芸大学 教育学研究科 教授
森脇愛子	青山学院大学 教育人間科学部 心理学科 准教授
竹森俊之	札幌市立中央小学校きこえの教室 元教諭
倉島 楓	札幌医科大学附属病院耳鼻咽喉科 言語聴覚士
小木原弘晃	札幌市立中央小学校きこえの教室 教諭
池田 寛	さっぽろ子ども聞こえ相談ネットワーク 幹事会代表
内田美花	株式会社パディンハウス 代表
高野賢一	札幌医科大学 耳鼻咽喉科・頭頸部外科学講座 教授

難聴児バディ・システムハンドブック

発行日：2022 年 5 月 25 日

発 行：国立研究開発法人日本医療研究開発機構（AMED）

「聴覚障害児のバディ・システムについての研究」班

印 刷：株式会社アイワード

